
その姫に従う者は.....

目目連

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その姫に従う者は…………

【Nコード】

N5850W

【作者名】

目目連

【あらすじ】

袁術の配下、劉勲。字を子台。

袁術領の政務を一手に引き受ける彼。

そんな彼に一つだけ欠点があるとすればそれは……………。

そんな彼が織り成す外史の扉が今、開かれ、語られる。

1話 蜂蜜色の姫に傳く者（前書き）

どうも、初めましての人もお久しぶりの人も、目目連です。

お楽しみいただければ幸いです。

1話 蜂蜜色の姫に傳く者

ここは荊州の城。そこには孫堅が没した後、その隙をつき袁術がその玉座についていた。

そして、孫堅の娘 孫策は袁術の客将という扱いを受け入れるしかなかった。

「それで？今日は何の用かしら、袁術ちゃん？」

苛立ち気に桃色の髪をした女性は言う。この女性が孫策。そして、孫策の目の前、玉座に座る少女が袁術である。

「うむ。……………なんじゃったかの？」

袁術は玉座に座り、足を浮かせてプラプラとさせる。

「……………」

その態度に孫策の頬が引きつる。

「そんなことより蜂蜜水が遅いのじゃー」

それに気づく様子もなく、袁術はつきつきとした心持ちで扉の方を見ていた。

そしてそこから何やら慌ただしい足音が聞こえて、勢いよく扉が開かれる。

入ってきたのは一組の男女。何故か、一つの盆を取り合うように持っていた。

「ちよつと早く離して下さいよー。お嬢様に渡せないじゃないですかー」

女性の方は紺色の髪をショートに揃え、頭には小さな帽子を被り、腕には“袁”の文字が書かれた腕章をつけていた。

「何を言っているのですか、貴女は？ 離すのはそつちですよ。これは僕がお嬢様のためにお作りしたものですよ。僕が渡すのが筋です」

男性の方は少し茶色みの入った黒髪に首にはマフラーのように布を巻いていた。こちら手腕には“袁”の文字が書かれた腕章をつけていた。

「おお！七乃、七々しちな、待つておったのじゃ！早う、妾に蜂蜜水を持つてまいれ」

袁術は二人を見ると目の色を変える。正確には二人の持つ盆に乗った蜂蜜水を見てだが……。

「はい、只今お持ちいたしますよー。ほら、離して下さい、七さん」

「貴女も強情ですね。僕が渡すとさっき言ったじゃないですか！？」
と二人は盆を取り合いながら袁術の前までやって来る。

「はい、お嬢様。お待たせしました」

「うむ。ご苦ろ」

「一人だけ抜け駆けなど許しませんよ、七乃さん。はい、どうぞ、お嬢様」

「う、うむ。ごく」

「貴方こそ抜け駆けしてるじゃないですか！？」

一人が袁術に盆を差し出すともう一人がそれを取り上げる。そんな

ことを繰り返していた。

「ううー。どちらでもよいから蜂蜜水を渡すのじゃー!」

「ほら、お嬢様のご立腹ですよ。早く手を離して下さいよ、七さん」

「それを言うなら七乃さんが離せばいいじゃないですか?」

ぐぐぐ、と睨み合う二人。

物欲しそつに盆を見つめる袁術。そして……。

『あ』

互いに引つ張りあつた末に、盆の上から蜂蜜水の入った入れ物が飛び、袁術の元へ行く。

逆さまの状態で……。

パシャリつと袁術は頭から蜂蜜水を被る。

「うう………」

涙目になる袁術。

『お、お嬢様!??大丈夫ですか!??』

二人は慌てて、袁術に駆け寄る。

「べたべたなのじゃ」

（か、可愛い！）

二人は蜂蜜水で濡れた袁術を見て、目を輝かせていた。

「……はっ。早く、着替えましょう！そのままではお風邪を引いてしまいます。この劉勲がお手伝いを……………」

「七さんはここの後片付けをお願いします。お嬢様のお着替えは私がしますので」

「なッ！？そんな羨ま……………じゃなくて。って、既に居ないッ！？」

そくさくと袁術の手を引いて、部屋に行ってしまう張勲。

「くっ。またもお嬢様のお着替えを……………七乃めえ」

床に手をつく劉勲。

「……………はっ。まだ温かい！？お嬢様の温もりか！？」

彼は基本的に紳士^{へんたい}だった。

「そうか……………これはお嬢様から滴った蜜……………」

一応、訂正しておくが、蜂蜜水である。

「お嬢様の蜜……………ハアハアハア」

舐めるように床を拭く劉勲。しかも首に巻いたマフラーで、だ。

「……私、帰っていいかしら？」

「……あ、居たんですか、孫策さん」

たった今気がついたかのように劉勲は孫策を見る。ただ、体勢は床に張りついたままだった。

「私、何で呼ばれたわけ？」

「あー、はいはい。南の方に賊が現れたとか何とか。ちゃちゃつと片づけてもらいます。詳しくは……面倒いので以下省略。現地で調べてもらえますか？」

「はいはい」

投げやりな劉勲の態度にも慣れたように孫策は手を振って、部屋から出ていこうとする。

「あ。そうだ、一つお願いがありました」

「なによ。早く帰って準備したいのだけど……」

「それはこちらと同じです。早くここを片づけて、お嬢様の着替えを覗き……様子を見に行かなくてはいけないのですから」

劉勲は立ち上がり、孫策の方を見る。

「出来れば、捕まえた賊の一族郎党皆殺しにしておいて下さい」

と、さも平然と言う劉勳。

「は？……なんでそこまでののよ？」

「何故って……。お嬢様の領地で好き勝手やったのですから、当然ですよ」

同然でしょ？と孫策に同意を求める劉勳。孫策は顔をしかめる。

「……………出来ればやっておくわ」

「何を渋るのですか、孫策さん？貴女がいつもしていることをやればいいですよ」

「私は無害な民をなぶる趣味はないわ」

「無害？有害？」

カクンと首を傾げる劉勳。

「それを決めるのは貴女ではありません。それでも、もし貴女が命に反するなら……」

「貴方に何かできるのかしら？」

孫策も本気で言っているわけではない。今の自分の置かれている立場は十分に理解している。

それでも反発せずにはいられない。孫家の当主として。

「まあ、僕程度が貴女をどうにかできるとは思いませんよ」

劉勲は肩を竦める。

「そういえば末の妹さんはお元気ですか？」

「貴方、いきなり何を言って……………」

「可愛らしい妹さんですよ。まだまだ遊びたい盛りの元気な娘さんですよ。でも、あまり遅くまで遊んでいると危ないですよ。」

ねえ、孫策さん、と劉勲は笑う。何のおかしさもない普通の笑み。それが逆に怖い。

「シャオに何かしたら、許さないわよッ」

「さて、何かあるのでしょうか？…………まあそれは孫策さんの働き次第じゃないですか？優秀な方には何の心配もなく働いてもらうようにこちらでも配慮はしますよ」

ではお願いしましたよ、と劉勲はその場から出ていく。

「くっ……………」

苦虫を潰したかのように顔をしかめる孫策。

「さあ、片づけも終わりましたし、お嬢様の下へ……………」

「妾がどうかしたのかや？」

「お、お嬢様！？」

後ろから袁術が張勳を連れて現れた。

「あ、あの。お着替えは？」

「うむ。七乃に手伝ってもらって今終わったところじゃ」

「……………」

orz。

袁術の家臣。そして幼女をこよなく愛する紳士。^{へんたい}劉勳子台、真名を七々（しちな）。

だが、幼女至上主義を除けば袁家の常識人であるのだがそれが理解されることは少ない……………いや、皆無である。

「劉勲將軍、おはようございます」

「あ、おはよう。今日も朝から精が出ますね」

劉勲が厨房に行く料理人たちが忙^{せわ}しく働いていた。

基本的に幼女が関わっていない限り、劉勲は人当たりの良い好青年だった。

「袁術様の朝食の準備できてますよ」

と料理長は膳に盛られた朝食を見ながら言う。

「では、お嬢様には僕が持っていきますね」

と劉勲は膳を持って厨房を後にする。

「あ、でもまだ袁術様は起きて……」

「止めとけ、新入り」

劉勲を止めようとした調理人を料理長が止める。

「ああやって朝食を持って行って袁術様の寝顔を見るんだよ、あの方は」

今や劉勲の性癖は周知の事実だった。

「ふふ。前は七乃さんに邪魔をされましたが、今回はそうはいきませんよ」

膳を持ちながら、不気味に笑う劉勲。朝も早い、すれ違う人は少ないが数人とすれ違つと怪しげな視線を投げられるが、それが劉勲だと分かると皆、納得して去つていった。

「さあ、お嬢様の寝顔を、あまつさえ寝返りで乱れたそのお姿をこの目にとくと堪能しましょう！」

袁術の部屋の前で不気味に笑う劉勲。そして袁術を起こさないように静かに部屋に入ると、そこには……………。

「あれ？居ない？」

部屋の中はものけの空だった。

「ば、馬鹿なツ！？あのお嬢様が既に起きているとでもいうのか！？いや、そんなはずは間違いなくお嬢様なら昼まで寝ようとぐずるはずだ」

そんな馬鹿な、と劉勲は寝台に近づく。

「……………温かくない、だと」

袁術の布団に顔を埋めて、温度を測る劉勲。

いや、温度を測るなら別に手でもいいのだが、もっと言うなら埋める際に寝台へのダイブも必要ないのだが……………。

端から見たら完全に犯罪者の行動である。

「うん？何やら布団の中にあるな……………」

考えながら、布団に思いつきり抱きついてた劉勲は布団の中に異物を確認した。

「これは……………手紙？まさか、お嬢様からの誘い！？」

多分、この男近いうちに逮捕か、入院が必要なのではないだろうか……………。

そんな機関も施設もない世界では詮なきことではあるが……………。

「……………違う。これは七乃の字か？何々……………」

『お馬鹿な七さんへ。』

お嬢様は私の部屋で一緒に寝ています。

朝食も私が用意しますので、早くお仕事に戻って下さい」

「チクシヨ！またやられたか！七乃めえ……。ちっ、仕方ない。お嬢様の私物を漁^{あさ}ってから仕事に戻るか」

とまず始めに替えの下着の入った棚へ向かう劉勲。

何故それを完璧に把握しているか甚^{はなは}だ疑問である。

棚を開けて、物色しようとすると……。

『追記。』

お嬢様の私物も私の部屋に移動させました。

早く仕事に戻って下さい』

手紙のみが入っていた。

「……………」

劉勲の手紙を持つ腕が震える。

「…………ふふ、ふふふふ。これはもう、この劉子台への挑戦だな？
良いだろう……受けてたとう。待っている、七乃おおお！！」

と劉勲は張勲の部屋へと向かう。

「
フフフ」

「どうかしたのじゃ、七乃」

「お嬢様、起こしてしまいましたか？」

「いや、外の物音で起きたのじゃ」

一緒に寝台の中で袁術と張勲が入っていた。袁術は今起きたように目を眠たそうに擦っていた。

「そうですかあ。もう少し寝ていても大丈夫ですよ、お嬢様。煩いのはどこかに行きましたから」

「ん？……では、もう少しだけ寝るのじゃ」

「はい、おやすみなさい、お嬢様」

袁術は布団を被り直すと寝息を立てる。

（ふふ。七さんもまさか私たちが隣の部屋に居るとは思いませんよね……）

実は二人は張勳の部屋ではなく、袁術の隣の部屋で寝ていたのだっ
た。

（お嬢様の寝顔を堪能していいのは私だけです）

2話 劉勳の部屋

「またしてもやられたあああ!!」

机の上に書簡が山積みになった劉勳が叫ぶ。

「くそつ。七乃め、どうでもいい案件を回しやがって……これではお嬢様のところに行けないではないか!？」

愚痴りながらも手を動かす劉勳。

「それにしても」

「

「何なんですか、全く!？」

張勳の机にも山積みになった書簡があった。

「まさか七さんも私と同じことを考えていたなんて……」

そう。両者ともどうでもいい案件を相手に回し合っていたのだった。

「劉勳將軍、少々よろしいですか？」

部屋の外から副官の声がする。

「何ですか？僕は忙しいのですけど……」

「申し訳ありません。近隣の豪族の方がお目通りを願っております」

「……ちつ。またかよ、クソが。忙しい時に限って来やがって。狙ってんのか？」

基本的に対人では誰に対しても丁寧口調だが、独り言や愚痴の時は言葉が荒れる。

「……………はあ。分かりました、直ぐ行きますので、いつもの場所に通しておいて下さい」

ため息を吐いて、劉勲は副官に指示を出し、他所向きの服に着替える。

「劉勲様、お忙しいところお目通りいただき実にありがとうございます」

「ええ、ホントに忙しいところに来ていただいて……。もしかすると貴方は僕の政務の邪魔をしに来たんじゃないかと思うぐらいですよ」

「え？あ、いえ、申し訳ありません」

齒に衣着せぬ物言いの劉勲に豪族の男は慌てて、頭を下げる。

「まあいいのですけどね。今のところ貴方がお嬢様に対して有害ではないですし」

と劉勲は椅子に座る。然程広くない部屋の上座の一段上がった所に

椅子が一つだけ置かれた簡素な来客の間。

「それでこの度は何のご用ですか？さっきも言いましたが、僕は忙しいので手短にお願いますよ」

「はい。今日は劉勲様にお渡ししたいものがありまして……」

（……………またか）

イヤらしい笑みを浮かべる豪族の男に劉勲は小さくため息を漏らす。所謂、賄賂というやつだ。名声と財力がある袁家に取り入ろうとする諸侯は多い。まだ幼い袁術よりも劉勲の方が与しやすいと考えるのだ。

それに劉勲の趣味は広く知れていることも一つの要因だろう。

男が扉の方に声をかけると縄で数珠状に繋がれた少女たちが入ってくる。

色白な娘から褐色の娘。黒髪から銀髪まで幼い以外には共通点のない様々な少女たちが劉勲の前に並ぶ。

「喜んでいただけますかな？」

男は満足気に笑う。それは己の地位が確固たるものになることを喜ぶ笑みだ。

慢心した男には劉勲が呆れていることも分からなかった。

「ふうん……。これは随分と様々な娘を集めましたね」

少女たちを順々に見る。殆どが怯えた目でこちらを見ていた。中には光の宿らない目をしている少女までいた。

「もつとよく見たいですね。こっちへ来てもらえますか？」

「はい、畏まりました。……ほら、さつさと劉勲様の下へ行け」

男は少女たちの背中を突飛ばし、劉勲の前へと歩かせる。少女たちは一段上がった所まで上ると、劉勲は少女たちを見ずに男を見る。

「ご苦勞様でした。褒美をあげますので、そこまで来てもらえますか？」

と劉勲は床に書かれたバツ印を指差して言う。バツ印の横には『乗るな、危険』と書かれていた。

「え？こ、こちらですか？」

男は劉勲に伺うと、劉勲は黙って頷く。

劉勲の目は有無を言わさない意志を感じ取れた。

「……………ここですよろしいですか」

男は渋々とバツ印の上に立つ。

「うん。じゃあ、褒美に

死ね」

カチリツと椅子の手すりのスイッチを押す劉勳。

「ッ!?!.....だが、そんな見え見えな手には引つ掛からな　　う
わああああ!!」

予想していた男は印から飛び退くが、飛び退いた先には穴があった。
正確に言うならバツ印以外の全ての床に穴があった。

部屋の中で安全なのは劉勳の座っている一段上がった場所とバツ印
の所だけだった。

「正直者は馬鹿を見るけど、愚か者は死を見るよね」

劉勳はそう言いながら、再びスイッチを押すと穴は塞がる。

「さて、と.....」

劉勳は連れてこられた少女たちを見る。ビクリツと肩を震わせる者
もいた。

「とりあえず奥に侍女たちを控えていますから、先ずは身なり
を整えて下さい。話はそれからですね」

劉勳は少女たちのボロい服　既に布と言った方がいいのかもしれ
ない　見ながら言う。

少女たちは戸惑いながらも奥へと続く扉に入っていく。

「.....あ。その黒髪の娘は残ってもらえますか?」

「え？私ですか？」

最後に入ろうとしていた黒髪の少女を呼び止める劉勳。

「はい」

「……でも、縄が……」

「いやいや、貴女それ解けるでしょ？」

「……」

劉勳がそう言うで一瞬だけ少女の瞳が鋭くなる。

艶のある長い黒髪は膝裏まで伸び、細い柳眉の下にはくりくりとした目があり、顔も整った少女だ。

「……」

少女は無言で縄を解くと部屋に残る。警戒心の現れで劉勳とは距離を置いたままではある。それを気にすることもなく、劉勳は続けて喋る。

「やっぱり、身のこなしが武人のそれだね。多分どこかの間諜かな……おっと、勘違いしないでほしいけど別に君を捕まえるつもりで呼び止めたわけじゃないからね」

劉勳は大袈裟な動作で腕を振る。

「……うん、反応は特に無し、か……」

少女が劉勲を観察していたように、劉勲もまた少女を観察していた。

「まあいいか……。今のところお嬢様を暗殺しに来たわけじゃなさそうだし……。ああ、話が逸れてたね。で、君に残ってもらったわけはね」

劉勲が一度区切ると少女にも緊張が走る。いつでも動けるようにと体を、心を準備する。そして、劉勲の言葉を待った……。

「君、今連れられてきた娘たちがどこから来たか、分かる？」

「え？」

予想外の問いに声が自然と出してしまう少女。

「いや、だからさ。彼女たちを返さなくちゃいけないから彼女らが連れられてきた村を知っているなら教えてほしいんだよ。あの年代だと詳しく自分の村の場所を説明できる子は少ないからね」

少女が呆然としている傍らで劉勲は説明し続ける。

「で、君に頼むわけだけど……理解してくれた？」

劉勲は少女を見る。

「……………全員を返すんですか？」

「勿論。僕は確かに幼い女の子が好きだけど、それでも強引に手に入れたいわけじゃない。いや、寧ろそういうのは嫌いな質だと言え

るね。幼い女の子は自由気ままにのびのび暮らしているからこそ可愛く、愛しく、愛らしいのだよ、君！！」

段々と熱が入ってくる劉勳。少女が大分引いている。

「全く、最近はそれを理解しない輩が多すぎるんだよ。いくら綺麗な花でも荒れた地に咲いていてはその美しさは半分も分らないだろうに。つまり、幼女は可愛いが更に可愛くあるためには相応の場所生きてこそ輝くものであり！それこそが」

熱弁を振るう。いつの間にか後ろにボードが現れて、それに描きながら説明している劉勳。

「と、まあこんな感じです……………あれ？何の話でしたっけ？」

正氣に戻る劉勳。

「まあいいか…………と、言うわけでよろしくお願いしますね」

劉勳は少女にそう言うと言いつつ部屋から出ようと出入口の扉へ向かうと一段上がった場所から一歩下りようとすると。

パカッ。

床に穴が開き、劉勳が落ちていく。

「ええ！？」

少女が初めて感情的な言葉を口にした。

ストンツ。

すると天井に穴が開き、劉勳がそこから落ちてくる。

「びつくりしましたか？」

どや顔で少女を見る劉勳。

「ふっふっふっ。そんな顔が見たかったですよ。それでは今度こそお願いしますね」

少女の驚いた顔を確認して、劉勳は再び扉に歩き出す、が。

びよん。

「ええ！？」

今度は床が跳ね上がる。劉勳はそのまま天井に突き刺さる。ぶらぶらと足が揺れていた。

そしてずると足が天井に飲み込まれていくと、今度は床から劉勳の頭が、胴体が出てくる。

「ええ！？」

「ハハハ。ビックリしたよね！」

またまた満足気に笑う劉勳。

「まあ、冗談はこのくらいにして」

と劉勲は今度は出入口ではなく、壁に向かって歩き出す。

そして、壁に手を着くと……………。

クルン、パタン。

「ええ!?!」

壁が回転して、元に戻る。劉勲は壁の中へと入っていった。

ガガガガガッ。

今度は天井が大きく開き、そこからゴンドラが紐に吊るされて降りてきた。勿論、劉勲がそれに乗っていた。

「ええ!?!」

「H A H A H A H A」

劉勲の来客の間。又は袁術を楽しませるために様々な仕掛けの施された絡繰部屋だった。

「明命？こんなところで何してるのよ？」

孫策が袁術に呼ばれ、屋敷の中を歩いていると見知った臣下の顔が見えた。孫策は辺りに人の気配が無いことを確認してから話しかけた。

「あ、雪蓮様。その、蓮華様の命で最近行方不明になっていた少女たちを探していたのですが……………」

黒髪の少女　　周泰は孫策に事の経緯を話す。

「ふーん。劉勲はそう言ってたのね……………」

「はい。後……………」

と周泰は何かを取り出す。

「お饅頭を貰いました」

「……………ねえ？ホントに変なことされなかった。例えば体が不自然にぶつかったとか……………」

「い、いえ、何も……………。よくしてもらったくらいです。頻りに私の頭を撫でて、可愛いつて言ってくださったくらいで……………」

「明命。もう劉勲に近づいちゃ駄目よ。お菓子とかにつられてついていっっちゃ駄目だからね？」

ガシッと周泰の肩を掴む孫策だった。そんな孫策を不思議そうに見つめる周泰。

「へえー、あの娘が孫策さんの所の優秀な工作員の周幼平だったのか……」

箱の蓋を閉じながら、呟く劉勲。

「そこまでは頭が回らなかったな……」

椅子に腰かけて、肘をつく劉勲。

「……そろそろこんな賄賂が意味が無いことは周知させておくか。何か利があればと思ったが何にもありやしねえな、こりゃ」

深いため息を吐く劉勲。そして机を見ると山積みの書簡の山があった。

「さてと……。さつさと終わらせてお嬢様の所に行きますか」

クックックと喉を鳴らす劉勲。

「……………つと、いかにも黒幕っぽい雰囲気を出している場合ではないですね」

劉勲は机の上に積まれた書簡を片付け始める。早く袁術に会う為に……………。

3話 黄色に混じる異色

「ん？なにやら門が騒がしいですね」

門の前で門番と誰かが言い争っている様だった。

「どうかしたのですか？」

劉勲が顔を覗かしてみると……………。

「あ、劉勲様。それが……………」

「劉勲様！私を雇って下さい！」

門番が劉勲に気づくのと同時に門番と言いつついていた人物が劉勲に
すぐるように言い寄ってきた。

「およ？　　ッ！？可愛い幼女！？」

と劉勲の目の前には今が最盛期　　劉勲曰く　　な少女が居た。

「こらっ！勝手に中に入ると……………」

「ああ。いいですよ、構いませんから」

「ですが、劉勲様……………分かりました」

何かを言おうとした門番だったが、劉勲が物凄く頬を緩ましているのを見て、言葉を摘むんだ。

こんな性癖で言動の怪しい劉勲ではあるが袁術の領地の政を一身に引き受けている苦勞人でもあるのだ。

そんな彼が嬉しそうにしていることを邪魔することは門番を始め、屋敷で働く者は誰一人できなかった。例えばそれが　　劉勲の策略であつても……………。

「それでどうかしたのですか？」

劉勲は少女の目線に合わせるように屈む。

「私を！私を貴方の元で働かして欲しいのです！」

少女は鬼気迫るように劉勲に言う。実際、少女と劉勲の距離は近くなる。そして劉勲のにやけ度は増していくが、少女は気づいていないようだ。

「うん……………後、5年くらいですね」

「え？」

劉勲は少女を見て、ポツリと呟く。

「いや、君が少女から女性になりそうな時間だよ」

「もしかして、それまで待てってことですか？」

「いやいや、逆だね。それまでしか働かせてやれないね。僕は基本的に幼女に対して優しいだけであって、君の思っているような人間ではないんだよ」

少女は昔、劉勲への賄賂として連れてこられた者の一人だった。

たまにあるのだ、勘違いをして劉勲の元に働きにくる者は。それが幼女もしくは少女の場合は無条件に雇ってはいるが、年を取ると途端に興味をなくし、里に帰らせるか別の部所に飛ばしてしまう。

他の部所に飛ばされた者も一ヶ月とせず里に帰っていく。劉勲の元では優しくされていたが、他の部所ではそうじゃない。

「だからね。できるなら僕は君には故郷でのびのびと暮らしてもらいたいね。今なら帰りの駄賃くらいはあげられるからね」

勿論、幼女だからである。

「全く、相変わらずのようね」

「うん？見てたのかい？」

少女は諦めて帰っていく姿を見送っていた劉勲に後ろから声がかかる。

「おや。君がここに来るなんて珍しいじゃないか」

腰まで伸ばした明るい茶色い髪に切れ長な目。非常に整った容姿に発育のいい体。確実に美人のカテゴリーに入る女性を見ながら劉勲は言う。

「何を白々しいことを……。貴方が呼んだのでしょうか？」

「ああ、そうだったそうだった。もしかして待たせてしまったかな、紀霊さん？」

劉勲は大袈裟なアクションで女性　紀霊に手を合わせる。

「誠意の込もってない言葉なんかは要らないわよ。それで私を呼び出したのは何でかしら？」

「うーんと……あれ？今日は荀正ちゃんはいないの？いつも君の後を可愛らしくついてくるのに」

劉勲はキョロキョロと辺りを見渡す。

「あまり私の副官に手を出さないでほしいわね。特に貴方には、ね」

「全ての少女を愛するのは僕の使命だからね。無理」

劉勲は微笑みを浮かべながら言い、紀霊はこめかみを引くつかせる。

「さて。世間話はこれくらいにして、本題を話そうか……」

パンツと手を叩き、劉勲は言う。

「僕はこれからちょっと出てくるから、その間お仕事を頼みたいんだよ、紀霊さん」

「貴方がお嬢様の元から離れるなんて珍しいこともあるのだな」

「

と紀霊は驚くと次の瞬間顔つきが変わる。

「 巣を張りにいくのか、“戦蜘蛛”」

「……随分と懐かしい名前を呼ぶね、紀霊さん。僕は君に話した覚えはないけど、どこでそれを？」

笑みを崩しはしないが、劉勲の威圧が増すのを感じた。それは紀霊が今までに劉勲からは感じたことがないほどに強烈なものだった。

「魯肅から聞いたのよ……」

「かぁー。あの耄碌め、他人の話をペラペラと……」

「時折出るその口調も、関係しているのかしら？」

「あぁん？……おつと。まぁ、それなりに関係はしていますけど。どこまで聞きましたか？」

一瞬、そのままの口調で話しそうになり、一旦整ってから劉勲は紀霊を見る。

それは獲物を逃がさない猛禽の目だった。

「詳しくは聞いてないわ。ただ酒の席で魯肅が漏らしていたのよ。昔、こちら辺に蜘蛛の旗を掲げた賊が居たと……。その頭が頭の切れる者でその者が考えた策で当時の官軍は相当手を焼いたと、ね」

それはさながら蜘蛛の巣のごとく。入り込んだ者を絡め、絞め、取り込む。

しかも誰にも気づかれることなく、じわじわと……。

「……まあいいか、“その程度”なら。それでは後は任せましたよ」

劉勲は紀霊に背を向ける。そのまま門を出ていく。

「待て、劉勲！お前は何を考えているのだ。もしお嬢様に害するの

ならば……」

「それだけはありません。僕はお嬢様を守るためだけにここにいますのでから」

劉勲は振り返ることなく言う。

「それに幼女が悲しむところは見たくないですからね」

ニヤツと笑い、紀霊を見る。

「それじゃあ、お願いしますね、紀霊さん。僕の部屋にお仕事が残って」ますから、片付けておいて下さいね」

「は？ちよつと待て、それはどういう……」

と紀霊が問いたただそうとした時には劉勲の姿はなかった。

その後、紀霊は1ヶ月間、劉勲の残した仕事の尻拭いに部屋に籠ることになるのはまた別の話だ。

『ほあああああ！！！！』

とある平原に仮設の舞台が設けられて、その上で三人の旅芸人が歌と躍りを披露していた。

それを取り巻く男たちの熱気は凄まじいものだった。

そして、その中に……………。

「ほあ！ほあああ！！地和ちゃああん！！愛してますよおおお！！！」

劉勲が居た。首に巻いた布は黄色になっていた。

「新入り、今日も気合い入ってるな」

「はい、それは勿論ですよ」

爽やかに笑みを返す劉勲。

「さて、どうやら旅芸人の追っかけが暴徒と化したようですね」

舞台が終わり、それぞれが天幕へ戻っていくなか劉勲は辺りを見ながら呟く。

「後はそれに紛れてガラの悪い者たちが混ざって暴れている、という感じですね。まあこれならお嬢様の障害にはなり得ないとは思いますが……………」

と劉勲は三人の旅芸人が入っていく天幕を見る。

「ここまで他人を魅せる彼女たちは少し引っかかりますね……………少し調べてみますか」

劉勲は夜の闇に紛れて動き始める。

「……………ふむ。別段変わったものはないですね」

只今、劉勲、旅芸人の天幕でガサ入れ中。

「うわっ、派手な下着ですね。あちらが透けてしまってますよ!?!? あ、これをお嬢様が着たら……………ぐへへ」

掴んだ下着を懷へ仕舞おうとする劉勲。

「……………っ!?!?」

そこで誰かが部屋に近づいてくる気配を感じた。

「…………あれ？今、部屋に誰か居たような…………？」

「ちょっと姉さん、扉の前で止まらないでよ」

旅芸人 張三姉妹が部屋に入るとそこには誰も居なかった。

（ふう。危機一髪でしたね…………）

劉勲は天井に張り付いて難を逃れたのだった。

（さて収穫はあまりありませんが、戻るとしますか）

劉勲はその場から去ろうとしたその時 。

「今日の公演も大盛況だったね！」

「暑い。もう汗ベタベター早く着替えよつと」

三人がステージ衣装から着替え始めたのだった。

（……………もう少し調べていこう）

天井に張り付いたまま息を潜める劉勲だった。もうただの変態にか見えない。

「それにしても昔の閑散としていたのが嘘みたいよね」

張三姉妹の次女、張宝が呟く。

「そうね。私たちの歌を多くの人に聞いてもらえるのは嬉しいわね」

張三姉妹の三女、張梁がそれに応える。

「美味しいものもたくさん食べれるし、お姉ちゃん太っちゃうかも」
「」

張三姉妹の長女、張角は頬を綻ばせながら言う。

「それもこれもこの太平妖術のお陰ね」

張宝は一冊の本を取り出す。

「これのお陰で皆が私たちの歌に耳を傾けてくれるようになったんだもの」

愛しそうに本を見る張宝。

「初め貰った時はただの古くさい本だと思ったけど……………」

「とんだ掘り出し物だったわね」

（あれは……。人心掌握術の類いか……）

劉勲は三人が取り出した本を見つめる。

（誰が何のために作ったのかしらないが、お嬢様の脅威になる前に……）

処理しておこう。

ガタッ。

「誰ッ！？」

「その書物をこちらに渡してもらえますか？」

扉の前に劉勲が立っていた。

「僕もできれば手荒な真似はしたくないのですよ」

と手を前に差し出す劉勲。

「き」

「き？」

ここで現状を整理しておこう。

調査のため、劉勲は張三姉妹の天幕に潜入。ガサ入れ開始。目的外のブツを入手。

その後、張三姉妹が帰還。緊急離脱のため天井に張り付く。

撤退をしようと思ったところに張三姉妹が着替え始める。現状維持を決断する劉勲^{へんたい}。

張宝が太平妖術を取り出し、その回収に向かう。

そして現状、である。

つまりは　　。

「キヤアアアアアア！変態よ！！」

三人は着替え中なのだ。

「うん？……ああ。心配なくていい。僕は君たちみたいな成長している体に欲情はしないから」

「意味分かんないわよ！？」

手近にあったものを投げる張宝。布で体を隠しながらである。

「はぁ……。張宝は見た目ペツタンコなのに脱ぐと結構膨らんでいてがっかりでした」

「なんで私が残念がられなきゃいけないのよ!？」

やれやれと肩を少し上げて、首を振る劉勳。

投げられたものを避けることも忘れてはいない。

「どうかしたんスカ!？」

扉の向こうから声が聞こえた。どうやら警備の者が先程の悲鳴を聞いてやって来たのだろう。

(ヤバッ。少し早計すぎた……。つい調子に乗りすぎた……)

基本的に劉勳は馬鹿だった。そして袁術が絡むと周りが見えなくなることが多々とある。

劉勳は三人から見えない自分の背中越しに扉の取手部分に触れる。

「大丈夫スカ!？あ、開けますよ!？」

と外から取手が動く、が……。

「あ、あれ?開かない?この扉に鍵なんてついてないはずなんスけど……」

ガチャガチャと音はするが扉が開かれることはなかった。

「さて、話の続きを……………」

扉の方に一瞬目をやった劉勲は三人に視線を戻すとそこには誰も居なかった。

「やれやれ、逃げられましたか。まあ、いいでしょう。どうせあの程度ならそこら辺の諸侯に討伐されるでしょうし……………」

そう呟くと劉勲はその場を後にするのだった。

4話 戯れ

「うん。今日もいい天気よね」

孫策は背中を伸ばしながら、外を歩く。

いつものように周瑜の監視の目を切り抜けて、城下の町へと繰り出していた。

町をぶらぶらしながら、民たちの顔を見る孫策。皆、笑顔で活気のある顔だ。それを見て満足そうに頬を緩める孫策。

そんな長閑な時間を楽しんでいる孫策の耳に子供たちの悲鳴が聞こえた。

「何ッ！？確かあっちから聞こえたわね」

悲鳴の聞こえた方に向かっていく孫策。向かう先には子供たちがよく遊んでいる広間があり、そこでは……………。

「きゃーきゃー」

「ぐへへ。待て待てー」

子供たちを追いかけて回す劉勲^{へんしつしゃ}が居た。

「現行犯なら首を切り落としても構わないわよね」

腰につけた長刀に手を掛け、広場へと近づく孫策。そんな孫策に子供たちはいち早く気づき、寄ってくる。

「貴方たち、もう大丈夫よ。今、助けて」

子供たちを庇うように立つ孫策に子供たちは孫策の袖を引っ張って言う。

「孫策様だ〜。孫策様も一緒に遊ぼうよ〜。あのお兄ちゃん、面白いんだよ〜」

「……………え？」

「あれ？孫策さん？なんでこんなところに？」

「いや、それはこっちが聞きたいわよ。貴方こそ何をしているの、劉勲？」

劉勲は孫策に気づいて、子供たちを追いかけるのを止める。というか間近まで来ないと孫策のことを認識すらしなかった。かなり真剣に追いかけていたようだ。

「見て分かりませんか？幼女の尻を追いかけているのですよ」

「……………分かりたくないわよ、そんなの」

真顔で答える劉勲にため息を吐く孫策。

よくよく見てみると劉勲が追いかけるのは女の子ばかりで、男の子には見向きもしていなかった。

かと言って男の子がつまらなそうにしているわけでもなく、一緒に走り回って楽しそうにしていた。

「ねえねえ、お話ししないで遊ぼうよお」

子供たちが二人の袖を引く。

「よしッ。遊びましょうか！何をしますか？お医者さんごっこですか？お医者さんごっこですよね！？」

「かくれんぼ」

目が血走った劉勲を華麗にスルーする子供たち。

「いやあ、孫策さんも幼女^{こじょ}好きなんですね」

「何故かしら、今、字が違う感じがしたのだけれど………」

目の前で子供たちが走り回るのを見ながら劉勲が言う。

「まあ、でも貴方とこうして過ごすなんて思いもなかったわね」

「うん？」

「いえ、なんでもないわ。それより劉勲はよくこうして子供たちと遊んでいるの？」

まるで親のような瞳で子供たちを見守る劉勲に孫策はそう訊ねた。

「まあ……そうですね。政務の間を見てはこうして遊びに来ていますね」

頻度で言えば孫策が政務を抜け出す回数より多い。

「それに未来を担う子供たちが笑顔であることは素晴らしいことですからね。それを間近で見たいと言つのもありますからね」

「……………」

「うん？どうかしましたか？」

まじまじと見る孫策に劉勲は首を傾げた。

「いえ、貴方からそんな言葉が出るなんて思ってもみなかったわ」

「失礼な。僕はいつも子供に優しいじゃないですか！？」

「女の子限定でしょうが……………」

「まあ僕も男ですからね。異性にしか優しくなれないのは否めないかもしれないけど……………」

と劉勲は子供たちを見る。

「僕としては誰でも笑って暮らせる世を作ろうとしているんですよ。子供も大人も平等に、ね」

「劉勲……………」

「七々ですよ」

「え？いいの？それ、真名よね」

「構いませんよ。いずれ“敵になる方”でも今は味方ですから……………」

「ッ！？」

「別に今どうしようという気はないですよ。貴女方はウチの大切な戦力なのですから……。ただ、お嬢様を殺すのは勘弁していただきたいのですけど」

劉勲は真っ直ぐに孫策を見る。

ッ！？

その瞳に言い知れぬ悪寒を感じる孫策。

「……………策殿ー！ここに居られたのか」

そこへ黄蓋が現れる。

「また部屋から逃げ出して、冥琳のやつがカンカンじゃったぞ」

どうやら周瑜に言われて、孫策を探しに来たようだ。

「抜け出すのはよいが、大概になされろよ。儂までとばっちりを…

……………」

そこで黄蓋は孫策の隣に座る劉勲に気づく。

「そういえば祭は初めてだったわね。こっちは袁術ちゃんの所の…
……………」

「
劉勲」

「あら？知っていたの？」

「お下がり下さい、策殿！！」

孫策の手を引き、劉勲から離すと庇うように立つ黄蓋。

「何なのよ、急に！？」

「主が劉勲か……？」

「……はい、そうですよ。呉の宿将、黄公覆殿」

「我が主に何用得近づくのだ？」

「ただの世間話をしていただけですけど？」

「ふん、戯れ言を。どの口が抜かすか」

きつく睨む黄蓋に劉勲は肩を竦める。

「ちよっと、私だけ置いてかないでよ」

「すみませぬ、策殿。じゃが、策殿はこの男が何者かご存じなので
すかな？」

「だから、劉勲でしょ？袁術ちゃんの側近の……」

「そうじゃ。だが、ただの側近ではない。こやつは我らを嵌めた張
本人やもしれぬのじゃ」

「嵌めたって……。どういふことよ、祭!？」

「策殿はあの袁術がこうも上手く江東を手に入れれると思っておるのか？」

「それは母様が没して、その混乱に乗じて……」

「それにしても些か上手く行きすぎだとは思わなんだか。まるで後ろで糸を引く者が居るようだと……」

「まさか……」

二人は劉勲を見る。子供たちに向ける目をしたまま二人を見ている劉勲。

それは自分より下の、弱者を見るような目。

「全く、勘繰りすぎですよ、黄蓋さん。ただの将にそこまでできるわけないじゃないですか」

「ただの将、か……笑わせてくれる。一時は賊の頭目として官軍をいのように弄もてあそんだ軍略家をただの将と呼ぶものか」

「……あの耄碌め。いくらなんでも喋りすぎだろ」

舌打ちをする劉勲。

「……はあ」

ため息を吐いて、劉勲は立ち上がる。

「それでは僕はそろそろ帰りますね。お二人も早めに帰ってはどうか？あまり周瑜さんに迷惑をかけるのはどうかと思いますよ」

「劉勲！まだ話は終わって……………」

黄蓋が劉勲を引き留めようとするが……。

「始まってもしませんよ、そんなもの。そんなに知りたいなら確実な証拠でも持ってきて下さい。どうせ、無理でしょうけどね。そんなヘマをするわけないですし……………」

と劉勲はその場を後にする。

「さて、ちょっと段取りは変わっちまったが、孫策たちへの猜疑心を煽ることは成功したな。計画も次の段階へ入るか……………」

城へと戻る道を歩きながら劉勲は一人呟く。その目の端には自身の首に巻き付けられた布がユラユラと揺れる姿が映る。

5話 競う参謀たち

袁術は年若く、その思考もまだ大人とは到底言えない。

だから、領地の政にはその側近が支えている。

そのもつともたるのは劉勲と張勲の二人だった。

張勲は軍事面を、劉勲は政治面を主に担当していた。

二人とも実力は中の上くらいで、他国の優秀な将に比べれば見劣りしてしまっただろうが、確かに袁術の領地を支えているのはこの二人なのだ。

「……………」

「……………」

そんな二人が出くわす。それは袁術の寢室の前だった。

「あら、偶然ですね、七々さん」

「そうですね、奇遇ですね、七乃さん」

両者とも笑顔であるが、視線はぶつかり合い、火花を散らす。

『ッ！！』

二人は同時に動きだし、扉の取っ手に手を伸ばす。

「なんですか、七々さん？お仕事はいいんですか？こんな所で油を売ってないで戻った方がいいんじゃないですか？」

「ご心配は無用ですよ。終わってますし、たまに“紛れている”関係ない仕事は適任者に回してますから。それより七乃さんこそ、お仕事が山のように残っているのでは？」

「こちらもご心配はいりませんよ。私には心優しい部下がいます

から」

両者、取っ手を譲り気はなかった。

「これは初耳ですね。貴女のような人にも部下というのが付いているんですね」

「はいー。私って人望があるんですよ……七々さんよりも」

「あははっ」

「ふふふっ」

バチバチと火花を散らす二人だった。

その頃、とある武官の部屋では……。

「なんで今日はこんなに仕事が来るのよ!？」

パンツと机を叩いたのは紀霊だった。

劉勲への関係ない仕事を回された適任者であり、張勲の心優しい部下である。

つまり、劉勲と張勲の仕事の尻拭いをさせられている可哀想な人である。

「……………」

その隣に机に突っ伏して、動かない少女が紀霊の補佐役である荀正である。あまりの多さに頭がパンクして停止状態なのだ。

「全く。……また、あの二人か」

ため息を吐きながらも仕事を片付けていく紀霊。

袁家で良い人は苦勞人なのだっただ。

「そろそろ諦めたらどうですか、七々さん？」

「諦める？何それ、美味しいの？」

未だに扉の前で睨み合う二人。

『ッ！！』

二人が共に動き、袁術の寢室へと競うように入っていく。

『お嬢様、おはようございます!!』

二人が満面の笑みを浮かべて、言う。だが……。

『あれ?』

中には誰も居らず、ものけの空だった。

「またですか!? 貴女は懲りもせず。さあ、ネタは上がってますよ。お嬢様をどこに隠したんですか!？」

「何を言っているんですか!? どうせ、前の腹いせに貴方が隠したんでしょ? 早く“私の”お嬢様を返して下さい」

「なにどさくさに紛れて自分の物みたいに言ってるんですか!？」

「お嬢様、何処ですか?」

ベツトの下などを探す張勳。

「くつ。こちらにも負けてはいられないッ!!」

何を競っているのかは分からないが、兎に角互いに対抗意識が強いのだった。

「お嬢様、こちらですか?」

と劉勲は柵を開けて、調べる。

「七々さん、いくらお嬢様が小さいからと言ってもそんなところにいるわけじゃないじゃないですか」

「そう言う七乃さんこそ、何故引出しを開けているのですか？」

両方とも袁術を探す名目で部屋を漁っていた。

「あっ！」

と張勳が声を上げる。

「まさか、お嬢様を見つけたのですかッ!？」

劉勲は張勳に駆け寄り、引出しの中を覗く。

「お嬢様ったらこんな所に蜂蜜の壺を隠して。道理で最近、蜂蜜をねだってこないわけですね」

どうやら袁術の隠していた蜂蜜を見つけたようだった。

「これは没収……いや、ここはわざと放置して、お嬢様の前で見つけるのも良いですね。慌てふためくお嬢様………良い」

想像してニヤける張勳。

「……何をニヤけているんですか、七乃さん。気味が悪いですよ。さて、こちら部屋の物色を………いえ、お嬢様を探さなくては」

既に目的は切り替わっている二人だった。

「これは！？……お嬢様の汗を拭いた布！？微かに香るお嬢様の甘い香りが香ばしい」「これは！？……お嬢様が隠したおねしょの証拠！？これを目の前に出した際のお嬢様の狼狽した顔は……」「これは！？……お嬢様の替えの下着！うむむ、いまいちときめきに欠ける。ここは僕特選の艶やかな下着と交換を……」「これは！？……お嬢様の寝間着！微かに温もりが残って……」

明らかに怪しい二人だった。

「
ところで、七々さん」

物色中、唐突に張勳が話しかけてきた。

「何ですか？今、僕は覗き穴作りに忙しいのですけど……」

壁に張りつき、何をしているかと思えば、壁に穴を開けていた劉勳。

「……貴方はなんでお嬢様にお仕えしているのですか？」

張勳はそれをスルーして言う。

「まあ…………貴女と同じですよ」

劉勲は振り向かずには答える。後ろ姿からでも頬を指先で掻く動作は丸分かりであった。

「え！？いや、七々さん。確かに貴方はとてつもない変態さんだと知っていましたけど……。流石に異性の貴方がそれをするのは、ちよつと。同性の私だから許されるのであって、もし貴方がしたら 首が飛びますよ？」

「ちよい待てや、コラア！？お前、何するためにお嬢様に仕えてんだよ！？てか、真面目な空気を作り出したのそっちの癖にそっちから壊すってどうなんだよ！！」

素の口調でツツコミを入れる劉勲だった。

「ふふふ。そっちの方がいいですよ、七々さん」

「はあ？…………どういうことだよ？」

「だって、いつもの口調だと私と被るじゃないですか」

「お前の都合かよッ！？」

「あはははっ」

笑う張勲に劉勲は舌打ちをする。

「で、なんであんなことを訊いたんだ？」

「興味本意ですよ」

「……………」

「あ、無視はダメですよ。私のか弱い心が傷ついちゃいますよ」

「あ、うん。そうですね、ごめんなさい」

「ちょっと！なんでそこで真面目になるんですか！？そこは『お前のどこがか弱い心だよッ！？』って言うところですよ！」

「さっきの仕返しだ」

「性格悪いですよ、七々さん」

「それはお互い様だ」

ニヤリと笑う劉勲。

「で、冗談は置いて、本当のところはどうなんですか？」

「……………軽々しく話す内容でもねえし、軽く話せる長さじゃねえ。ただ、お嬢様には借りがある。それも死んでも返せねえ程のな……………」

「……………」

そう言つと劉勲は自分の首に巻かれた布に触れる。

「さて、そろそろ真面目にお嬢様を探しましょうか、七乃さん。貴女が隠したのではないみたいです……」

劉勲は口調を元に戻し、部屋から出ようとする。

「……………七々さん」

それを何も言わず見送る張勲。

「何か？」

「……………いえ、何でもありません」

「そうですか……。では、失礼します」

劉勲はそのまま立ち去る。

「全く、らしくねえな……」

劉勲は廊下を歩きながら呟く。

「いつもみてえにのりくらりと煙に巻けばよかったじゃねえかよ……」

すっかり素の口調に戻っていた。

「……………」

そつと首の布に触れる劉動。

「……………よしっ！」

そしてパシンツと頬を叩き、気合いを入れ直す劉動。

「さあ、お嬢様を探しましょうか！先ずは厠で、次に風呂場へ……」

「のう、まだ仕事は終わらぬのか？」

袁術は椅子に腰掛け、足をぶらぶらさせながら目の前の机で政務に励む女性に声をかける。

「すみません、お嬢様。何分、今日は仕事が多いもので……」

「そうなのか……。つまらぬの。早う終わらせて、妾と遊んでたも紀霊よ」

目の前の女性 紀霊に向けて口を尖らせる袁術。

「張勳殿や劉勳殿の所に行かれてはどうですか？」

「先に行ったのじゃ。でも二人とも部屋には居らなんだ。荀正もまだ動かぬし、暇なのじゃ！」

どうやら二人とはすれ違いだったようだ。

「後少しで終わりますので、もう少しお待ちいただけますか？」

「うむむ。七乃や七々は仕事があっても妾と遊んでくれるのじゃ」

そして残った仕事は紀霊に押し付けているのだ。

「……………すみません。私はあの二人ほど器用ではないので……………」

若しくは欲望に忠実ではない。

「ひまななのじゃ!!」

「……………はあ」

ジタバタと駄々をこねる袁術にため息を吐き、頭を抱える紀霊だった。

(なんで私がこんな目に……………)

一瞬、自分も苟正のようにショートしてしまいたく思う紀霊だったが、ある程度の能力のある紀霊は要らぬ苦勞を背負い込むことが多いようだった。

紀霊の懐には胃薬が常備されていると城の者の中では有名な噂だった。

5話 競う参謀たち（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

6話 蜂蜜狩り

「ええー。皆様、本日は忙しい政務の中、お集まりいただきありがとうございます」

劉勲は庭に集められた袁術の臣下たちを見ながら言う。

「こんな朝っぱらから一体何なのよ」

当然、その中には孫策たちも居た。

「皆様にお集まりいただいたのは他でもありません。この国をお嬢

様が治めて以来の大問題が発生したためです」

いつもの陽気な雰囲気ではなく、重々しく言う劉勲に集まった者たちは固唾を飲む。

「実は 蜂蜜が不足しています」

『 は？』

「と言うわけで、皆様にはこれから山へ入って蜂蜜狩りを行ってもらいます。ちなみに拒否した方は斬首です」

ニコリツと笑顔でそう宣言する劉勲。

「さあ、皆さん。張りきっていきましよう！」

全員が蜂蜜狩りの服装に着替え、山の入り口までやって来ると劉勲は片手を上げて言うのだった。

「あ。一つ言い忘れましたが、この蜂蜜狩りで最も多く蜂蜜を獲得した者には報奨が出ますよ」

それを聞き、一同が騒がしくなる。皆、目の前の餌に釣られたのだった。しかし、世の中はそれほど甘くはない。飴があれば、鞭

もある。

「そして、一番少なかった者にはそれ相応の罰が用意してありますので、あしからず」

『ッ！？』

それを聞き、我先にと競うように森に入って行く者たちを見て、満足気に頷く劉勲の顔にはとても良い笑みが張り付いていた。

「全く。なんで私たちがこんなことしなくちゃいけないのよ」

「そう不貞腐れるな、雪蓮」

口を尖らせる孫策の横で周瑜が言う。

「これも袁術のご機嫌取りだと思え」

「ぶうー」

「おや？孫策さんたちは山に入らないのですか？」

孫策たちの所に劉勲が歩いてくる。

「……………今から入るところよ」

「そうですか、それは何より。頑張ってくださいね。僕は孫策さんたちを応援していますから」

孫策たちを笑顔で手を振り、見送る劉勳。

「さて、こちらも行きますか……………」

「……………」

誰もいない城の中、袁術が寝台で寝ていた。

文官も女官も含めて、全ての人間が蜂蜜狩りに駆り出されていたのだ。

誰もいないはずの城だが、袁術の寝台に近づく者がいた。

「……………」

軽装に身を包み、顔を隠す侵入者。そして懷から短剣を取り出す。そつ、この者は暗殺者なのだ。

城の中が誰も居なくなる好機に現れたのだった。

「……………」

気持ち良さそうに寝る袁術を一度確認すると短剣を袁術の心臓に向けて、振り下ろす。

「……………ッ!？」

だが、それは途中で不自然に止まる。

「……………やれやれ、お嬢様が寝ているのに物騒なことですね」

「ッ!？」

後ろから声がして、暗殺者は身構えて、振り返る。そこには劉勲が笑みを浮かべたまま立っていた。

「へえ、流石に声を出すことはないですか……………」

劉勲は暗殺者を見る。

艶のある黒髪に、小麦色の肌。顔を隠しているため、大きな団栗眼しか見えないがおそらく少女だろうと思う。

「まあ別に素性を調べようなんて思いませんが……………」

劉勲が一步前に出て、暗殺者との距離を詰める。

「……………」

詰め寄る劉勲に対して暗殺者は短剣ではなく、背中の直刀に手を掛けて身構える。

「あ、動かない方が良いですよ?」

そう言うと劉勲は顔の前で何かを弾くような動作をする。

ピンツと何かが張る音がする。

「……………ッ!?!」

何かを感じ取った暗殺者は辺りを警戒する。

「まあ、もう手遅れなんですけどね」

「なッ!?!」

身構えたまま動かない暗殺者。いや、“動けない”のだ。身体に数十本の糸が絡み付いて、身動きが取れないのだった。

あやとり
殺取『甬』
むしなこ

次第に絡まる糸の数が増えていく。それは数百、数千、数万と暗殺者の体を覆い隠していく。

身動きの取れない暗殺者は為す術なく糸に覆われて、まるで蛹のようになる。

「もしかして幼女なら僕が容赦すると思いましたか？助かると思いましたか？僕程度なら殺される心配がないと思いましたか？甘いですよ」

ピンツと再び何かを弾く劉勳。

「殺取『甬』は別に拘束するものではないですよ。身体中に巻き付いた糸は絞めるだけじゃない」

蛹のように包まれたその中では徐々に締められ、絞められる。そしてそれだけに止まることはなく、その身体を切り刻む。

糸で作られた真つ白な蛹は次第に赤く染まる。

「お嬢様に害為すものは誰であろうと、幼女であろうとも、帝であろうとも、例外なく　僕が抹殺します」

「雪蓮様、これぐらいでよろしいですか？」

「ええ、ありがとう、明命。それにごめんなさいね。こんなくたらないことに付き合わせて」

両手に抱えた蜂の巣を孫策に渡す周泰。

「いえ、滅相ありません!」

手を振り、否定する周泰。

「私は雪蓮様たちのお役に立つなら何でもします!」

「明命……貴女、ホントにいい子ね」

「はい、本当に可愛いですね、周泰ちゃんは」

「ええ、そうよね……って、劉勲!? いつの間に!?!」

「はい。どうもです、孫策さん」

いつの間にか後ろに現れた劉勲に驚く孫策。

「貴方、どこから現れたのよ?」

「幼女の居るところ、この劉子台在り!」

ビシッと決める劉勲に顔が引きつる孫策だった。

「お久しぶりですね、周泰ちゃん。顔を見るのは屋敷で会って以来ですね」

そんな孫策を放って、劉勲は周泰に顔を向けて挨拶をする。

「はい! お久しぶりです、劉勲さん。いつもお手紙ありがとうございます」

「え？ちよつと待つて……明命、手紙つて何のこと？」

「あ、はい。いつも私がお猫様のことで悩んでいるといつの間にか私の部屋にお手紙がありまして、色々と助言をいただいています」

「ちよつと待ちなさい。今、色々と問題な単語が聞こえたわよ。貴方、ウチの明命に何をしているの！？」

笑顔で答える周泰に孫策の顔は更に引きつる。

「やだなあ、孫策さん。何を誤解しているのですか？もしかして、僕がいつも周泰ちゃんをつけ回して、困った時に手を差し伸べ、いい人を演じつつ、徐々に周泰ちゃんを籠絡しようとしているとお考えですか？」

「……………してるのね？」

無表情で剣を鞘から抜き放つ孫策。

「だから、誤解ですつて。僕もそこまで暇ではありませんよ。

三日に一度ぐらいの頻度です！」

「十分つけ回してるじゃない！？」

「あれ？おかしいな？お嬢様よりは頻度も濃さも自重してますよ？お嬢様の場合は四六時中に加え、お風呂なんて当たり前。おはようからおやすみまで……。はたまた、かわり」

これ以上の会話は劉勲のプライバシーの関係によりオフレコとなり

ます。

「明命。悪いことは言わないから変態^{あれ}とは関わらない方がいいわよ？」

「え？でも、劉勲さんはお優しい方ですよ？この前もお猫様の親御さんが怪我をされた際に偶々通りかかった劉勲さんが偶然持っていた傷薬を頂いて大事にいたらなかったですし……………」

「明命、気づいて！？何で偶々劉勲がそこに居たか！？そして、何故傷薬まで持っていたか！？」

「へ？」

純粋な周泰には分らないこの世の真理があるのだった。

「あ、周泰ちゃん。こんな所に偶々持ち合わせていた猫が……………」

と、懷から猫を取り出す劉勲。

「はうあ！？お猫様あ〜〜」

「ダメね。この娘、猫が絡むと理性を失くすわ……………」

「ニヤッ……」

「おっと……………」

猫が劉勲の手を引掻いて、地面に下りる。

「本能かしら？貴方、動物に嫌われる性質じゃないかしら？」

「うん？そんなことは無いんですけど……」

「お猫様〜〜モフモフ〜〜。……………え？」

劉勲から逃げた猫は周泰に擦寄り、周泰はそれを撫でてご機嫌だった。猫が何かを訴えていることに気づくと劉勲を見る。

「どうかしたの、明命？」

「それが……」

周泰は劉勲に聞こえないように小さな声で孫策に答える。

「お猫様が、その……劉勲さんから血の匂いがすると……」

「……………そう」

周泰からそれを聞くと孫策は劉勲を見る。

「貴方、今まで何をしていたの？」

「はい？何って……蜂蜜狩りですよ？」

劉勲は笑顔を崩さずに言う。

「まあ、主な僕の仕事は蜂蜜に群れる害虫の駆除なんですけどね。結構、大変なんですよ、これが……」

「……………」

何一つ不自然のない笑みではあるが、それが歪であった。

「さて、孫策さんたちも後少し頑張ってくださいね。あ、でもお嬢様からのご褒美は譲りませんよ?」

「それ、貴方も勘定に入ってたのね……………」

「当たり前です!! お嬢様をペロペロできる権利は誰にも渡しません!!--!」

おそらくそんなご褒美は用意されていないが、劉勲の頭の中ではこれ一択だった。

ちなみに蜂蜜狩りで優勝したのは……………。

「よくやったのじゃ、七乃!!--」

「はい」。お嬢様のために頑張りましたから」

「くそお。何が頑張っただよ。蜂蜜を取った奴らから奪ったんだろぅが…………。七乃めえ、またしても僕の邪魔をお……………」

「…………… (ニヤリ)」

「クソおおおおおおお」

6話 蜂蜜狩り（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

7話 戯れは常に命懸け

「なんか最近黄色いのが暴れてるらしいのじゃ」

玉座のまで袁術が言う。

「黄色い？……ああ、黄巾党ですね」

唐突な話にも直ぐに対応。それが袁家に仕える者に必須能力だ。

「そうじゃ。その、金平糖とかいう奴らじゃ！」

「流石、お嬢様！一秒前に聞いたことすら覚えられない！その能天気さ、流石です！」

「うはははっ。もっと褒めてたも」

袁術の全てを肯定する。それも袁家に仕える上で必須能力だ。

「よっ、この大陸一の能天気！」

「もっともっと褒めてたも」

上機嫌に片手を挙げる袁術だった。

「それでその者らの処分はいかがいたしますか、お嬢様？」

「そうじゃな……いつも通り孫策に退治に行かせるのじゃ！」

「それでしたら本隊には孫策さんに当たってもらって、私たちは分隊に当たるのがいいですよ」

と張勳が横から入ってくる。

「うむ？孫策だけではいかんのか？」

「はい。お嬢様の勇姿を民たちに見せるいい機会です。それに他の皆様も各々で退治しているみたいですし、お嬢様だけしないと世間体が……」

「うむむ。難しいことは分からぬのじゃ。よい、七乃の好きにいたせ」

「それでは分隊には私とお嬢様、本隊には孫策さんと七々さんに当たってもらいます」

「はい！意義ありッ！！」

劉勲が勢いよく手を挙げる。

「却下します」

即座に却下される劉勲。

「何故ですかッ!？」

「なんとなくですよ」

「あくまでも僕の邪魔をする気ですね、七乃さん」

「はい、そうですよ、七々さん」

「いつまでも僕が貴女に振り回されていると思わないことですよ」

不敵に笑う劉勲だった。

「全く、相変わらず無茶を言ってくるわね、袁術ちゃんたちは
孫策が黄巾党本隊の討伐へ向かう中、そう愚痴を漏らす。

「そういうな、雪蓮。そのお陰で蓮華様と合流できるのだからな」

「まあ、それはそうだけど……。なんか癪なのよね」

戦力を補給できることは嬉しいことだが、自分たちの仇敵がこうもアホ過ぎると張り合いがないとも思ってしまう孫策なのだ。

「ところで雪蓮、この箱には何が入っているのだ？」

周瑜が後ろの兵が四人掛りで運ぶ巨大な箱を見る。

「さあ？張勳がくれたのよ。戦に役に立つ道具ですって」

「中身は確かめてないのか？」

「どうせろくなものじゃないわよ。後でそこら辺に捨てていこうかと思ってるわ」

「それでも中身は確認した方がいいんじゃないか？」

「ええー。面倒じゃない」

「無駄に四人の兵を疲弊させる方がこちらとしては問題なのだが？」

「わ、分かったわよ……」

真顔で見つめる周瑜に孫策は冷や汗を掻きながら頷く。

「……袁術ちゃんのせいで冥琳に怒られちゃったじゃない。後で酷いんだから……」

ぶつくさ言いながら兵に箱を下ろさせて、蓋を開けて中身を確認すると……………」

「んーんんー」

中には手足を縛られ、猿轡を噛まされた劉勲が入っていた。

「……………」

無言で蓋を閉める孫策。

「雪蓮？中身は何だったんだ？」

「なまもの
生物」

「お姉様！！」

孫策の元に駆け寄る少女。彼女こそが孫家の二番目の姫、孫権だ。

「お姉様！！今、兵の者から聞きました。また一人で敵陣に突っ込

んだのですか！？貴女という人は、王という自覚が

」

再開して早々に孫権から説教を受ける孫策。

「で、でも蓮華？王として兵たちにその勇姿を示すことも大事よ？」

「賊相手にそのようなことをしなくてもいいのです！！貴女は王なのですよ！？我々には貴女が必要なのですよ！！」

「蓮華……………」

孫権も怒りたくて怒っているわけではない。心配しているからこそ、怒るのだった。

「ああ、感動に浸っている所悪いのですが、早く行きませんか？」
そこに空気を読まない人間が一人。

「…………劉勲。…………貴方、少し空気を読みなさいよ」

「いや、だって早く終らせてお嬢様の元に帰りたいんですよ、僕は貴女だってさっさと帰りたいて言っただじゃないですか、孫策さん」

投げやりな口ぶりの劉勲。

「あの姉様…………この男は？」

いきなり現れた劉勲を不審そうに見る孫権。

「あ、どうも。僕、劉勳。よろしく」

好み（ロリ）相手でないためか、挨拶が雑な劉勳。

「劉勳……確か明命からよく話を聞く、人の良い文官も同じ名だったな」

と後ろに控えていた周泰に確認を取る孫権。

「はい。その方がよくしていただいている劉勳さんです」

「そうか。いつも明命が世話になっているのだな」

幾分かは和らいだ視線を劉勳に向ける孫権。

「いえいえ、幼女に尽くすことが僕の天命ですから」

爽やかな笑顔で紳士^{へんたい}宣言する劉勳。

「……………姉様？」

「蓮華、言いたいことは分かるわ。でもね、気にしたら負けなのよ」

「さあ、そろそろ行きましょう」

「……………あの姉様？」

「まだ何かあるの、蓮華？」

「いえ、その……何故、劉勲はあの乗り方なのですか？」

孫権は劉勲の乗る馬を見ながら言う。

そこには馬に乗る劉勲が居た。ただし、鎧に乗っているのではなく、馬の背に横向きにうつ伏せに乗っていたのだった。まるで荷物のように。

「……………気にしたら負けよ」

チラチラと劉勲が孫権たちを見ているため、おそらくはツッコミ待ちなのだった。

「たくさん集まっているわね」

黄巾党本隊の場所まで来た孫策たちは集まる諸侯たちを見渡す。

曹操に公孫賛、劉備。そしてその他諸々。野心のあるものは本隊の方に集まっていた。

「関心している場合ではないぞ。我々も早速、軍議を始めなくてはならないのだから」

孫策に周瑜が言う。

「分かってるわよ。でも、アレをどうするのよ？」

と孫策は周泰と楽しげに話す劉勲を見る。

「そうだな……………居ないものとして考えよう」

「冥琳って、意外と悪よね」

「軍師とはそういうものだ」

「あ、孫策さん。僕、ちょっと用事があるので少し席を外させてもらいますね」

軍議が始まって第一声に劉勲がそう言ったのだった。

「ちょっと待ちなさい、劉勲。まだ軍議は始まったばかりだぞ」

孫権が席を立った劉勲を止める。

「いいわよ、蓮華。居ないなら居ないで楽し……………」

「姉様！？それでは他の臣下に示しが着きません！」

「いいわよ、そんなもの。それに劉勲は私たちの臣下じゃなくて袁術ちゃんの臣下なのだから」

「……………え？袁術の臣下……………」

「そうよ？言ってなかったかしら？」

「聞いてません！！」

と、標的が孫策に変わってる内に劉勲は何気なく軍議から抜け出していた。

「こんにちは」

劉勲はとある陣営に来ていた。

「久し振りね、劉勲」

「はい。貴女もお変わりないようですね、何よりです」

曹操ちゃん「

そこは曹操の陣営だった。曹操の同窓である袁紹と袁術は従姉妹であり、それによりいくらか面識があった。

「だから、ちゃん付けは止めなさいと言っているでしょ、劉勲」

「うーん……。でも、これが一番しつくりくるのですよ、曹操ちゃん」

劉勲は笑顔で言う。普通なら不敬罪で斬首であるが、袁家の後ろ楯がある劉勲には言葉で言う以外、今のところ対処がないのだ。

「はぁ……。で、貴方がここに居るということは袁術も来ているのかしら？」

諦めた曹操は話題を変えるのだった。

「いえ。僕は一人で箱詰めされて運ばれて来たんです」

「……………は？」

「まあ。僕も自分で言うていておかしいのは分かっていますけどね」

劉勲は肩を竦める。

「分かってはいるんですけど、これが事実なもので……………」

「そう。大方、張勲にでも嵌められたのでしょうかね」

「大正解！ご褒美にアツい抱擁なんていかがですか？」

手を広げる劉勲に苦笑いを浮かべる。

「貴方に好かれるのは何だか悪寒が走るわね。よく袁術は我慢できるわね」

「お嬢様は阿呆ごほうな子ですから分らないのですよ」

ニコリツと笑う劉勲。

「ところで曹操ちゃん……………」

「何かしら？」

「そろそろ僕の隣で零距离で武器を構えているこの二人を止めてくれないかな？」

曹操と劉勲が向かい合わせに座る中、曹操の忠臣たる夏侯惇、夏侯淵は劉勲の首に得物を当て、立っていたのだった。二人とも殺氣立つた目で劉勲を睨んでいた。

「何だか、じわりじわりと首の皮を押し始めてるんだけど……………」

「……………いいんじゃない？少しは緊張感が足りないみたいだし？」

「いやいや。これ、緊張感とかそんなモンじゃないでしょ？多分、くしゃみとかしたらその拍子にスッパリいっちゃうよ？」

「……………」

「ねえ？今、その手があったかって言った？言ったよね、夏侯惇さ

ん？あ、ちょっと夏侯淵さん？何で羽なんかを持ち出すの？そして無言で僕の鼻をくすぐるのは止めてくれる？」

なんだかおかしいな方向に転がり始めた。

「あのね、二人とも。僕は別に曹操ちゃんを馬鹿にしているわけじゃないんだよ？ただね、その小さくてペタンコな体型にあつた呼び方を……あれ？なんで曹操ちゃんも得物を構えるの？あの、無言で近づくのは止めない？本当に怖いからね。あれ？おかしいな。僕は今、生まれてからの記憶を思い返しているよ？」

劉勲はある意味何も恐れない胆力の持ち主だろう。何故ならこのやり取りは今日が初めてではないからだ。

曹操にあつた初日もこんな感じであるし、幾度か会う度に似たようなことをしているのだった。

「あ。お疲れ様、孫策さん」

黄巾党本隊には夜襲をかけた孫策たちを出迎える劉勲。

孫策たちの夜襲のお陰で黄巾党たちは浮き足立ち、そのまま集まった諸侯たちがなだれ込み、黄巾党は壊滅した。首魁の張角は曹操が討ち取ったと噂が流れていた。

「あら？帰ってきてたの？」

「はい。孫策さんたちのお陰で……」

あの後、孫策たちが夜襲をかけたと報告が入ったことにより曹操は劉勲を放し、討伐へと向かい、助かった劉勲だった。

7話 戯れは常に命懸け（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

8話 蜘蛛の巣（前書き）

仕事場からの初投稿です！！

いや、暇なんですよ。今、作者は会社に一人でPCに向かって仕事を
をしているのですが……飽きるわ！！特に急ぎの仕事もないですし
……社会人としてどうよ？

そんなわけで初の仕事場からの投稿、そして初のPCでの投稿です。

8話 蜘蛛の巣

黄巾党討伐の帰り道。

「そつえば周泰ちゃんは歩きなのですね」

劉勲は馬に乗り、歩く周泰を見る。

「はい。私はこちらの方が楽なんです」

「そうなのですか」。僕とは鍛え方が違うわけですね」

「あまりウチの子に手を出さないでもらえるかしら？」

そんな二人の間に孫策が馬を入り込ませる。

「何ですか、孫策さん？邪魔しないでもらえますか？」

「ウチの大切な子を貴方の毒牙にかけるわけにはいかないのよ」

両者とも睨み合い、目を外さない。

「何のことを言っているのか分かりませんよ、孫策さん？僕はただ周泰ちゃんと楽しくお喋りしているだけですよ？」

「そう。貴方のお喋りっていうのは相手のお尻を然り気無く触ろうとすることも含まれているのかしら？」

ちなみに今も劉勲は馬に横向きにうつ伏せで乗っているため、隣を歩く周泰には手を伸ばせば触れるのだ。

「え？それっていけないこと何ですか！？」

「さも、当然の如く驚かないでちょうだい！！」

心外そうに驚く劉勲に孫策は呆れる。

「全く。おかしいですよ、孫策さん」

「何故、私がおかしいことになってるのよ！？」

劉勲と喋っていると頭を押さえることの多くなる孫策だった。

「はあゝ。……………明命、劉勲ってこんななの？」

と、隣の周泰に話しかけると……………。

「はうあゝ。お猫様ゝモフモフですうゝ」

しかし、周泰は猫を撫でていて、聞いていなかった。

「あ。そういえばこの辺りは地盤が緩いですから気をつけてくださいね。もし、崩れたら谷の方に落ちてしまいますからね」

劉勲は道の端の谷を見る。落ちては命までは亡くならずとも、ただでは済まない高さだ。

「特に馬に乗っていると地面の違和感に」

「きゃあああああ!!」

「蓮華様ツ!?!」

とそこで後ろから声が聞こえた。

「蓮華!?!どうかしたの!?!」

「そ、それが地面が急に崩れて、孫権様が下に……………」

兵の一人が青い顔をして、報告に来る。

「まさか…………。蓮華!!」

孫策は急いで軍の後方に向かう。

「……ええ。僕、まだ説明の途中だったのに」

そして、何故か拗ねる劉勲だった。

「蓮華様！！蓮華様ああ！！」

孫策が後方にたどり着くと、甘寧が崖に飛び出そうとしているのを周りの兵が押さえていた。孫権が落ちた所はまだ地盤が緩くなっているのが時々、パラパラと砂が落ちていく。

「離せ、私は蓮華様を！！」

「落ち着いて下さい！甘寧將軍まで落ちてしまいます！！」

「落ち着きなさい、思春！！」

そこに孫策が現れる。

「しえ、雪蓮様……。蓮華様が、蓮華様があ……」

「ええ、聞いている。でも、落ち着きなさい」

孫策は落ち着いた口調で、諭すように言う。

「おや？どうやら、引つかかっているみたいですよ？」

劉勲は孫権が落ちたであろう崖の先を見下ろしながら言う。

「……え？どういうこと？」

「うん？どうやら、木の枝に引っかかっているみたいです。でも、どうやら気を失ってるみたいで動きませんねえ」

「い、今すぐ助けに！！」

「誰か紐を持ってきてちょうだい！！」

甘寧と孫策はそのことを聞き、直ぐに指示を飛ばすが……。

「うーん。それだと長さが足りませんね」

兵の一人が持ってきた紐を見て、劉勲が言う。

「もつと他のは無いの！？それか、他のと繋いで……」

「あ。枝、折れそう」

『何ッ！？』

劉勲の言葉に皆が慌てて、崖の先を見る。

「……………ふむ」

劉勲は何かを考える。

「孫策さん」

そして、孫策を見る。

「何よ。今、貴方に構ってられないのだけど……」

「帰ってお嬢様のお手伝いをお願いしますか？」

「だから、何を言って」

「その代わり、孫権さんは僕の方でなんとかしておきますね」

そついうと迷うことなく崖の方へ歩いていき、そして。

「じゃあ、お願いしますね」

そのまま飛び降りる。

「お、おい！ちょっと待て！……って、ホントに飛び降りて」

甘寧が止める前に劉勲は行ってしまった。

「わ、私も行きます」

「待ちなさい、思春！」

「雪蓮様！？何故、お止めになるのですか？雪蓮様は蓮華様のことが心配ではないのですか！？」

「心配に決まってるでしょ！」

「ッ！？」

気丈に振舞っているが、実の妹なのだ心配じゃないわけがない。甘寧もそのことに気づき、言葉を詰まらす。

「でも、あの者に任せて大丈夫でしょうか……？」

甘寧はそれなりに劉勲を観察していたが、どうにも信用しづらい男だと判断していた。袁術の家臣だということもあるが、何をするにもやる気はなく、いつも周泰と話していて仕事らしいことをしている様子がない。

「劉勲さんだったら大丈夫ですよ」

そこに周泰が話に入ってくる。

「劉勲さんは優しい方です」

「それはお前が思っているだけだろ……」

「違いますよ！！」

甘寧の言う事を否定する周泰。

「確かに私はお猫様のことになると我を忘れてしまいかもしれませ

んけど、それでも諜報員の端くれです。人を見る目には自信があります」

真っ直ぐな目で甘寧を見る周泰。

「確かに劉勲さんはお世辞にも真面目な方とは言えません。けど、お優しい方ですし、自分の矜持を持った強い方です」

「確かに私もそう思うわ」

孫策も周泰に同意する。

「劉勲のことは好きにはなれないけど、それでもアレのことは高く評価しているわ。アレがああ言ったのなら必ず蓮華を救って連れてきてくれると思うわ」

だから、と孫策は甘寧に向けて言う。いや、もしかしたら自分に言い聞かせていたのかもしれない。

「私たちはそれまで袁術ちゃんの子守をしましょう。アレが蓮華を助ける対価に示したことですもの。しっかりやらなきゃ、孫家の名折れよ」

「……………う。ううん」

「あ。起きましたか、孫権さん？」

「こ、ここは……？」

孫権が起きるとそこは山の中だった。焚き火を囲んで、向かい側に劉勲が座っていた。

孫権が寝ていた所には柔らかな草が敷き詰められていた。

「ここは……山中ですな」

劉勲は火を弄りながら、そう答える。

「憶えてますか、自分がどうなったか？」

「私は……………そうだ！私は崖から！？」

「はい！正解！！」

「熱ッ！？火種がこっちに！？」

弄っていた木の棒でビシッと孫権を差すと焚き火から火の粉が飛ぶ。

「ハハハ。まあ、それだけ元気なら大丈夫そうですね」

「何を根拠に言っているのよ！？」

「まあいいじゃないですか。とりあえず、寝てください。明日、帰

るんですから体力を回復してくださいね」

そついうと劉勲は横になる。

「なんなのよ……」

ガサガサ。

「……………ううん？」

物音に孫権が目を覚ます。

（何？ 獣？ …………… いえ、微かに金属の擦れる音がするわ。もしかして、賊！？）

と、静かに体を起こす孫権。音は段々とこちらに近づいてくる。

腰の剣に手をかける孫権。

「……………」

無言で音の方に向かう孫権。

「…………… 気にしないでいいですよ」

劉勳が静かに喋る。

「貴方も起きてたの!？」

「全く、騒がしいですね。夜は寝るものだ知らないのですか？」

「そんな悠長なことを言ってる場合!？賊が近くに来ているのよ!」

「大丈夫ですよ。それに僕は眠いんですよ」

ふあゝ、と欠伸をする劉勳。

「もういいわ。私が何とかするわ」

「あ、ちょっと……もう行っちゃてるし」

劉勳が何か言う前に孫権は音がした方へと行ってしまふ。

「全く。直情的なのは孫家の血ですか？はあ……」

ため息を吐くと、何やら指を頻りに動かす劉勳。

「これは何なんだ………」

孫権が音のする方向に向かうと、そこには確かに賊が数人居た。いや、正確に言うなら賊だったモノがあった。

それは何か鋭利なものでバラバラにされた肉片だった。

「全く。無闇に動き回らないでくださいよ。折角、張った巢を張り直さなくちゃいけないじゃないですか……」

孫権の後ろから劉勲が現れる。

「巢とは何のことだ！？こやつらに一体何があったのだ！？」

「殺取『むしなし知朱』。ただの蜘蛛の巢ですよ」

ふあゝあ、と先程と同じように欠伸をしながら言う。

「とある蜘蛛の旗を掲げた賊が官軍に対して常勝無敗だったのは、その戦鬪が主に山岳部で行われたからなんですよ、孫権さん」

「何のことを言っているのだ？」

「うん？まあ、分からないなら孫策さんにでも聞けばいいですよ。とりあえず寝ましよう、孫権さん。もう用は済んだでしょ？」

それだけ言つと劉勲はさつさと元の場所に帰っていく。

孫権は訳の分からない顔をしているが、流石にここですることなく、劉勲に続いて元の場所へと戻っていく。

「全く。張り直しですね」

ヒュンヒュン。

孫権たちが今まで居た場所に小さく風を切る音が鳴る。

「さあ、行きますか」

次の日の朝、劉勲と孫権は森からの出る準備をしていた。

「早く帰って、お嬢様成分を補給しなくては いけませんからね」

劉勲は先陣を切って歩き出す。

「ところで、自信満々に歩いていくけど、道分かるの？」

不安そうに後をついていく孫権はそう訊ねた。

「うん？全ての道はお嬢様に繋がっているのですよ。知らないのですか？」

「知らないわよッ！？というか、そんなわけないじゃない！？」

「…………え、マジで！？」

「心底驚いた顔をしないで！」

「はいはい。じゃあ、こうしましょう」

と劉勳はそこら辺から一本の枝を拾う。それを縦に立て、静かに手を離し…………。

「あつちです」

枝の倒れた方を指さす劉勳。

「そんなものが信用できるわけないでしょ！？」

道中、そんなやり取りが延々と繰り返されていたが、無事に二人は江東へと戻ることができたのだった。

8話 蜘蛛の巣（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

9話 風は引き始めが肝心

「くしゅん！」

「お嬢様？」

くしゃみをした袁術を見る劉勲と張勳。

「大丈夫なのじゃ。妾は元気なのじゃ。早う、仕事を持って参れ」

『お嬢様がおかしい！？』

いきなり仕事をしだす袁術に驚愕する二人。

「お、お嬢様？本当に大丈夫なんですか？」

「大丈夫だと言っておるであらう、七乃。心配性じやの。妾はこうも元気なのじや。だから、そのようにグルグル回っておらずとも良いのじや」

「いや、お嬢様、私は止まっていますよ?」

「うはははっ。面白いことをいうのじや、七乃は。現にこうして目の前でグルグルと……………」

「お嬢様、失礼します」

劉勲が袁術のおでこに触れる。

「完全に熱がありますね」

「お嬢様、早く休みましょう!」

張勲は寝台の準備に、劉勲は袁術を抱える。

「だから、妾は大丈夫だと……………きゅっ」

『お嬢様ああ!?!』

「さて、何とかお嬢様は眠られましたか……………。七乃さん」

「はい、分かってますよ。七々さん」

二人は頷き合う。

『とりあえず、近隣の町から薬草を根こそぎ買い漁りましょう!』

「止めなさい、二人とも」

目がマジな二人を止めに入るのは袁家の良心、紀霊だった。

「そんなことをすれば民から反感を買うわよ」

『え?それが何か?』

二人は声を揃えて言う。

「はあ。医者は二、三日安静にしていれば大丈夫だと言っていたわよ。それなら別に……」

「そんなことはどうでもいいんです!」

「今現在、お嬢様が苦しんでいることが重要なんですよ!」

張勳の言葉に劉勳が続く。

「お前ら……」

『後、薬を飲ませる際に弱ったお嬢様をじっくり観察したい!』

「……………」

声を揃える二人に紀霊は無言となる。そのまま袁術が療養している部屋の前に立ち、扉に板を立て掛ける。そこには……………。

張勳、劉勳立入禁止。

「お前ら、仕事しろ」

そのまま去っていく紀霊。

「ああー、お嬢様成分が足りない」

机にぐだぁーとしている劉勳。

とそこに……………。

「劉勲、居る？ちょっといいかしら？」

孫策が現れる。

「お嬢様一筋七々こと、劉勲は只今外出中です。日を改めてお越しください」

「いや、居るじゃない……………」

「心ここに在らず、です」

来訪者に対してピクリとも動かない劉勲。

「そうなの？袁術ちゃんが風邪を引いたって聞いたから、お見舞いの品を渡しにきたんだけど……………」

「お見舞いの品……………」

孫策の言葉にピクリと反応する劉勲。

「お見舞いの品……………それをお嬢様に……………つまり合法的にお嬢様に……………」

なにやらぶつぶつ呟く劉勲。

「まあ、いいわ。貴方が駄目なら張勲にでも渡し」

「何を言ってるんですか、孫策さん？早く行きますよ」

いつの間にか扉の前に立っていた劉勲が孫策に言う。

「……………もう慣れたわ。貴方の奇行にも……………」

ニコニコと先頭を歩いていく劉勲に諦めたようにため息を吐く孫策。

「そういえば蓮華のこと、ありがとね」

「うん？……………ああ、崖でのことですか。別にいいですよ」

袁術の部屋に行く中、孫策がそんな話題を振った。

「前に言っただじゃないですか。僕は有能な孫策さんに心置きなく仕事してもらうためには努力は惜しみませんよ」

と笑顔で答える。

「なんか貴方の笑顔って裏がありそうで怖いわね」

「裏なんてとんでもない。ただ、お嬢様に有益に働いてもらえればそれでいいですよ」

「それが裏でしょ……………」

「さて、それはどうでしょうね？」

ふふふ、と笑う劉勳。

「全く。貴方はそうやって煙に巻くのね」

孫策は呆れながら言う。

「こうした方が後々面白いですからね」

ニヤリと笑う劉勳。

「さあ、世間話も楽しいですが、お嬢様の弱った姿を観察し……鑑賞しに行きましょう」

「何故、言い直してそれなのよ……」

孫策は呆れながらも、このやり取りを楽しんでいるのか、口元がニヤけていた。

ルンルン気分で向かう劉勳がそれに気づいているかは定かではない。

『……………あ』

袁術の部屋の前で張勳と鉢合わせる。

「おやおや？七乃さん、どうかしたのですか？確か、立ち入り禁止のはずですが……」

「それは七々さんも同じじゃないですか。それに私はただお見舞いの品を渡しにきただけですから」

「それは奇遇ですね。僕もですよ」

ガシッ。

扉の取手を同時に取る二人。どこかで見たような光景だった。

「貴方たち、いつもそんなことやってるの？」

孫策が呆れたように言うのも分かる気がする。

「いつもってわけじゃありませんよ」

「週に4、5回程度ですね」

「それをいつもって言うのよ……」

「ふふふ。今日は引き下がるわけにはいきませんよ、七乃さん。なんとってお嬢様が風邪を引くなんて滅多にないことです。そんなお嬢様を見逃すわけにはいきませんからね」

いつになく真剣な劉勳。その理由は最低なものではあるが……。

そして何故か両手を高く上げて、片足を上げた
荒ぶる鷹のポーズをしているかは不明である。

「ふふふ。どうやら、本気のようにですね、七々さん」

そして、張勲もなにやらゆっくりと手を前に出す……………が。

「（チラチラ）」

「（チラチラ）」

二人とも動きを止めて、孫策をチラ見する。

「もしかして……………ツツコミ待ちだった？」

「もう孫策さんったらノリが悪いですよ」

「そうですね。これが紀霊さんなら真っ先にツツコミを入れてましたし……………」

「貴方たち……………実は仲が良いでしょ？」

『え？全然』

息がピッタリな二人だった。

「ちょっと私の真似は止めて下さいよ、七々さん」

「心外ですね。真似をしているのはそっちでしょ、七乃さん」

「何ですか？やるんですか？」

と今度は張勳が荒ぶる鷹のポーズをとる。

「今宵の僕は一味違いますよ？」

それに劉勳は手を前に出し……………。

『（チラチラ）』

そして、孫策は　　。

「……………私、用事を思い出したから帰るわね」

足早にその場を去ろうとした。

「あゝ！放置は止めて下さい！」

「分かりました、分かりましたから。孫策さんも一緒に弱ったお嬢様を観賞……………お見舞いしましょうよ」

二人はポーズを止めて、孫策を引き留める。

「貴方たち、本当に袁術ちゃんのこと心配してるの？」

「それは勿論ですよ！」

「夜も眠れないほどに！」

と二人は“とてもいい笑顔”で答えた。

「では、早速……………」

「ガサ入れですね、分かります！」

「違うわよ。お見舞いでしょ」

すかさずツツコミを入れる。

「おお、孫策さん。ツツコミの精度が上がりましたね」

「そんなこと褒められても嬉しくないわよ」

孫策は肩を竦めて、首を振る。

「お見舞いに来た、とは言っても肝心の袁術ちゃんは眠ってるわよ？」

孫策は寝台で小さく寝息を立てている袁術を見る。

「はい。だから来たんですよ。ちゃんと昼食に眠り薬……………よく効くお薬を混ぜ……………飲ませましたから」

しらっとんでも発言を投下する劉勳。

「ちょっと何をしてるんですか、七々さん!？」

これにはどうやら張勳もご立腹らしい。

「そうよ、劉勳。いくらなんでもそれはやり過ぎ」

「また私と“同じこと”しないで下さいよ!」

「……………」

「なッ!?七乃さん、何てことをしてるんですか!?二人分も飲んでお嬢様が目覚めなかつたらどうしてくれるんですか!？」

「それはこっちの台詞ですよ」

「…………袁術ちゃん。敵は身内に居るわよ」

「何ッ!?孫策さん、まさかお嬢様に謀反を!?そんな羨まし……羨ましいことはさせませんよ!」

「ごめんなさい。もうツッコミ止めてもいい?」

疲れ果ててきた孫策であつた。

「総入れ歯……………」

「は？」

「あ、違う。そう言えば、孫策さん。知ってますか？」

「何をどう間違えたのよ……………」

「風邪って、接吻を交わして他人に移すと早く治るらしいですよ？」

「は？そんなの迷信に……………って、なんで袁術ちゃんに近づいていつてるのよ、劉勲！？張勲も早く止めなさい……………って、貴女まで！？」

劉勲が袁術の寝台にゆらゆらと近づいていくのを止めようとした孫策は張勲に言うと、張勲も張勲で目の色を変えて、袁術に歩み寄っていた。

「ちょっと止めなさいよ、二人とも。袁術ちゃんが悲しむわよ」

何故、自分がこうまで仇敵たる袁術を庇わなくてはいけないのか甚だ疑問ではあるが、どうしても止めなくてはいけない気がした。
はなは

「お嬢様が……………」

「悲しむ……………」

ピクリツと足を止める二人に胸を撫で下ろす孫策。

「そうよ。だから、今日はこのくらいにして……」

『それもいいッ！！』

「…………駄目だわ、この二人」

更に目を輝かせる二人に諦めざるおえない孫策。だが、そこに……。

バンッ！

扉を開けて、女性が現れた。

「お・ま・え・ら」。何をしているんだッ！！」

『げっ！？紀霊さん！？』

「お前らはここへの立ち入りは禁止にしたはずだろ？何故、ここに居るのだ？ああん？」

背景に陽炎が見えるほどの怒気に怒られていない孫策まで萎縮してしまった。

「仕事はどうした、張勳！」

「あ、後でやろうかなあ」と。あはは……」

「貴様は！？劉勲！」

「放ってきました！H A H A H A」

「よし、分かった。とりあえずお説教だ。ちよつと来いッ!!」

フシューと口から煙まで出始めた紀霊に二人は首根っこを掴まれて、強制退室していく。

「……………孫策殿」

と扉の所で孫策に振り返る紀霊。

「すまなかったな、この阿呆たちに付き合わせて」

一礼をする紀霊に手を振って否定しておく孫策。

「あ、紀霊」

出ていこうとする紀霊を呼び止めた孫策。

「何か？」

「いいお酒があるのよ。今度、飲みに来ない?……………愚痴とか聞くわよ」

「……………ああ。本当にすまないな」

同情を禁じ得ないほどに紀霊の顔は疲れていたと後に孫策は語った。

「お前らは何度言えば分かるのだ。あれほどお嬢様を安静にと……」

「紀霊さんって怒ると口調が変わりますよね」

「何か男っぽい口調になりますよね」

正座をさせられて廊下で説教を受ける劉勲と張勲。

「何か言ったか？」

『イエイエ、ナニモ』

流石は袁術軍武官筆頭である。気迫が違った。

「大体だな、お前らはお嬢様を何だと思っているのだ。我らの君主で、この地の領主であるお嬢様に対して」

「長いですよ、これは」

「こうして話し出すと長いんですよ、紀霊さんは」

段々と二人の説教から袁術がいかにか可愛く、可憐であるかについて熱く語り出す紀霊。

紀霊もまた袁術LOVEな人だった。

9 話 風は引き始めが肝心（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

10話 追いかけてこ（前書き）

あれだ。うん、あれだ。なんか最近、お仕事が忙しくなってきた。

週1ですら、更新できないかも……。

でも、頑張ります。だって目目連は良さを語り尽くしてないから……！！

まだスパッツの

上文は本編にはあまり関係ありません。

10話 追いかけて

「ふん。今日もいい幼女日和、じゃなくて散歩日和ですね」

劉勲は仕事が一段落した所で部屋を抜け出し、息抜きに城内を散歩していた。

「こんな日は何か良いことが……………お!？」

と劉勲の目の前に書簡を抱えた少女が歩いていた。

程よく焼けた小麦色の肌に丈の短いチャイナ服。ただチャイナ服の下から伸びているのは生足ではなく、黒色の太股まで伸びた布
いわゆるスパッツだ。

その姿は動き易さを重視したとある武官の部隊の衣装なのだが、劉

勲にとっては目の保養の他に意味はない。

そして、劉勲は幼女や少女であれば例え後ろ姿であろうと、百里の距離があろうとも区別できる特殊技能の持ち主だった。

要はただの変態なのである。

「やあ、荀正ちゃん。お仕事ですか？」

「ッ!？」

後ろから声をかけられた少女　　荀正はビクリッと肩を震わせた。

そして、手に持っていた書簡を投げ出して、全力で劉勲から逃げ出したのだった。

「…………ふふふ。そうか…………鬼ごっこだね!負けませんよ!」

普通に逃げたのだが、それをどう解釈したのか鬼ごっこと判断した劉勲は荀正の後を追いかけていった。

こうして、荀正の悪夢の1日は幕を開けたのだった。

「……………はあはあはあ」

荀正は肩で息をしながら、物陰に隠れて辺りを伺う。

荀正は武官筆頭である紀霊の補佐官であり、その實力はかなりのものであるが、急に走った為、息が上がってしまい。今はそれを整えていたのだった。

何故、荀正は劉勲からいきなり逃げたのか？勿論、彼の性癖を知っている者なら逃げはするだろうが、それでも脱兎の如く走り出す必要はない。

では、何故か？

それは……………。

「びっ、くりし、た……………」

変に区切られた言葉を発する荀正。荀正は言葉が不得手なのだ。

そのせいで対人恐怖症なのだ。喋らずに隣に立っているだけならそれほどだが、一対一となるとそうもいかない。だから、こそ急に後ろから話しかけられたので、反射的に逃げてしまったのだ。

荀正は辺りを再度伺う。

「鬼ごっここの次はかくれんぼですか？」

そんなとき背後から声をかけられて、振り返ると……………満面の笑みの劉勲が居た。

「　　ッ!？」

驚きの表情を見せる荀正。先ほどは全くの無防備であるために背中を取られたが、今は完全に警戒状態である。

何度も言うが、荀正の実力はかなりのものである。本気で気配を消し、そして辺りを警戒していた荀正だ。

それが背中を取られたのだった。

「次は何をしますか？ままごと？お医者さんごと？」

ニツコリ笑いながら劉勲は言っただった。

「ッ!？」

再び走り出す荀正。

「おや？もしや、かくれ鬼でしたか？」

かくれんぼと鬼ごっここの要素をを併せ持つかくれ鬼。

「言っておきますが、僕は少女相手に手は抜きませんよ？むしろ、全力で相手取る!！」

爽やかに宣言する変態。じゅうけん

「そしてどさくさに紛れて……モネモネしたい!！」

あまりの興奮に『モミモミ』と『胸』が合体した。

「…………ひい!？」

手をワキワキとする劉勲を見て、更に速度を上げて逃げる荀正。

「フッフ」

既にすぐ後ろまで迫る劉勲。

生粋の武官の荀正に文官の劉勲が敵うはずはないのだが、荀正のあまりの怯えと劉勲の幼女への執念がパワーバランスを崩しているのか…………。

「さあ、捕まえたご褒美にペロペロと……………」

「止めなさい!このバカ者!」

ガツンと頭を殴られる劉勲。

「痛ッ」。誰ですか、折角の好機を!」

「うるさいわよ。私の副官に手を出すなど言っただでしょ!」

そこには模擬剣を肩に乗せた紀霊が立っていた。

荀正はすかさず紀霊の後ろに回り、劉勲から隠れる。

「あ、貴女まで僕の楽しみを取り上げるのですか、紀霊さん!？」

「別に私は他人の趣味にとにかく言つつもりはないけど他人の迷惑

を考えなさい、貴方は」

「いや、僕が楽しければ相手も楽しいでしょ？ほら、自分の嫌がることを相手にするなって言うでしょ。たがら、僕の好きなことを相手にすれば……ね？」

「何が……ね？、ですか。端から見ても、貴方がが一方的に楽しんでるようにしか見えないわよ」

「そんな馬鹿なッ！？」

「だから、わざとらしく驚かないで！」

「そんなことを言つて……。どうせ、紀霊さんだつて荀正ちゃんの寝ている時にあんなことやこんなことをしているんじゃないッ！なんて羨ましい！！」

「ッ！？」

劉勲の言葉に反射的に紀霊から離れる荀正。

「なッ！？ち、違いますよ、荀正！出鱈目ですから！？」

怯えた目をする荀正を宥めると、キッと劉勲を睨む紀霊。

「また口からでまかせを……。それは貴方ですよ！」

紀霊としては売り言葉に買い言葉だったが、劉勲は。

「何故、それを！？馬鹿な、僕はあの時ちゃんと周りに人が居ない

ことは確認したはずだ！」

『……………』

劉勲の言葉に二人が白い目を劉勲に向ける。

「はうあ！少女の冷えた視線……………これはこれで……………なんたるこゝ
褒美！！」

劉勲の性癖は天井知らずだった。

「……………戻るわよ、荀正」

「……………（コクリ）」

一人悶えている劉勲を余所に二人はその場を去る。

「……………そうは問屋が卸さない」

たが、目の前に劉勲が立ち塞がった。

「ここを通りたくば、その少女を置いて……って、なんで普通に素通りするんですか！？少しは構って下さいよ」

普通に素通りしようとした二人にすぎる劉勲だった。

「フヒヒ。この僕がそうもあっさりと諦めると思ったら大間違いですよ」

只今、劉勲は紀霊の政務室の屋根裏に潜み、隙間から中を伺っていた。

中では紀霊と荀正が仕事をしていた。

「荀正。そろそろ一息つきましょうか」

「……（コクリ）」

紀霊の言葉に頷くとお茶の用意をしようと席を立ち上がる。

「いいわよ。今日は私が淹れるわ」

それを手で制して、お茶の用意を取りにいく紀霊。

「あ。でも……」

何かを言おうとした荀正だったが、小さな声は紀霊には届かず、紀霊は部屋を出ていってしまった。

「……………」

一人部屋に残された荀正は静かに椅子に座る。

「なん、で私は、いつも、こうなの……」

途切れ途切れの言葉で呟く荀正。

「なん、で私、は言葉が、上、手く、話せな、いの……」

今にも泣き出しそうな声が荀正の口から漏れる。

「だから、駄目なのですよ、荀正ちゃん」

といきなり上から声がして、見上げるとそこには
足が生えていた。

「荀正ちゃん。いいですか？言葉が上手く言えなくても人間は普通に生きていけます」

天井に生えた足はぶらぶらと揺れながら、そう語った。

「キミが人との付き合いに障害を感じているのは気のせいです。言葉などただの音です。よく言うのではないですか、言葉ではなく態度で示せ、と」

ズボツと足が天井に引つ込む。荀正は穴の空いた天井を見上げたまま立ち尽くす、がいつまでも経っても劉勲が降りてくる気配はない。

ぴらっ。

「きゃっ!？」

「ううむ。僕的には下に下着以外を穿くというのは邪道かと思っていましたが、これはこれで扇情的であると言える」

いつの間にか荀正の後ろにしゃがみこみ、裾を捲り上げて、中身を
うむうむ言いながら見ている劉勲に思わず、声が出る荀正。

「見えないからこそ、更なる欲情を駆り立てる……………素晴らしい！
荀正ちゃん、ありがとう！僕はこれでまた一步成長できたよ！」

むしろ、退化である。

「な、ななな……………」

「うん？ああ、確かに僕の真名は『なななな』と読めるけどね。正
しくは七々しちやと読むんだよ」

「……………ね」

「え？何？好き？いや、困るね。僕も満更でもないけど、僕には
お嬢様が……………」

「死ね」

バサリッ。

劉勲の隣の机が一刀両断される。

「……………え？」

「ふふふ。大丈夫です。痛くないです。ほんの一瞬です」

光の無い瞳を劉勲に向けて、荀正はゆらゆらと近づいていく。手に

は愛刀が握られていた。

「え？あれ？ヤバくない、僕？」

劉勲の背中に嫌な汗が流れる。

「こ、ここは戦略的撤退を選択しま

」

スパンツ。

今度は反対側の椅子が一刀両断される。

「逃がさないです。そこを一步も動かしてはしません。指の一本たりとも……」

（ヤバっ。これは荀正ちゃんの琴線に触れてしまったか……）

「じ、荀正ちゃん。少し落ち着きましょう、ね？」

「ふ、ふふふ」

（チッ。完全に正気じゃねえな、こりゃ……）

劉勲は荀正から目を逸らさず、思考を巡らす。

「仕方ねえな、これだけは使いたくなかったが……」

「だから、動かないでと

」

荀正が愛刀を降り下ろすその手が止まる。そして視線の先には

。

真っ裸の劉勲が居た。

「きゃ、きゃあああああ!!」

「ふふふ。理性が吹き飛んでいるなら、更に吹き飛ばして思考停止にするばいい」

なにやら格好をつけている劉勲。だが、真っ裸だ。

荀正はあまりの出来事に愛刀を手放し、呆然とする。劉勲の企みは見事に成功したのだった。だが、真っ裸だ。

全ては劉勲の手の内だ。だが、真っ裸だ。
そして 真っ裸なのだ。

「い、いきなり何をしているのですか、貴方は!？」

「貴方ではない! 私の名前は全裸仮面!」

シャキーンと仮面を取りだし、顔に装着する劉勲。

「さあ! 全てを解放せよ!」

ビシッと決める劉勲。その時。

ガチャリ。

「お待たせ、荀正。お茶を持ってきたわ、よ……………」

茶器を持った紀霊が帰ってきたのだった。

そして、その後の展開は光の速さに匹敵した。

劉勲は即座に窓を突き破り、逃走。紀霊は持っていた茶器を投擲するが逃走した劉勲へは一步及ばなかった。だが、それは予想済みであり、直ぐに得物を構え、劉勲を追いかける。

こうして、命を賭けた追いかけっこが始まった。

「ちつ。劉勲め、逃げ足だけは速いわね」

「あの、大丈夫ですか、紀霊様？」

紀霊が乱れた姿で部屋に戻ると荀正が出迎える。

「油断していたわ。まさか、ここまで追ってくるとはね。大丈夫だった？何か変なことはされてない？」

「あ、はい。裸を見せられた以外は何も……」

「そう。とりあえず、今度会った時に削ぎ落としておくわ」

ギリリツと得物が反射して、紀霊の顔が照らされる。

「あら？そう言えば荀正。貴女、普通に話しているわね」

「……え？あ、ホントだ！？」

いつもは途切れ途切れなのに今はスラスラと言葉が出ていた。

「良かったわ。貴女の声って私、好きよ。透き通っていて、まるで鈴の音みたいだね」

「え、あ、わ、私の声なんてそんな……」

恥ずかしがる荀正に微笑ましく見守る紀霊。穏やかな空気が流れる。

「だが！私！参上！！」

と天井から劉勲……改めて全裸仮面、再び参上。

「なら、即退場しなさい！」

そして、紀霊対全裸仮面の追いかけっこは第2ラウンドが始まる。

10話 追いかけてこ（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしています。

11話 幼女に悪い奴はいない

「……反董卓連合？」

「はい」。麗羽様から参加するようにと手紙が来てましたよ」

玉座に座る袁術の横で張勳が手紙を読み上げていた。

「何故、妾が麗羽の言うことを聞かねばならぬのじゃ！そのようなものには参加せぬ！」

「でも、お嬢様？これには大部分の諸侯が既に参加を表明しているみたいですよ」

「それがどうかしたのかえ？」

「ここでお嬢様に参加なされないと、他の人たちが勢力を拡大しちやいますよ〜」

「むむむ。それはそれで嫌なのじゃ。でも、麗羽の言いなりも嫌なのじゃ!」

「でしたら〜、お嬢様」

と腹黒い笑みを浮かべる張勳。

「戦とかはテキトウに孫策さんに任せて、報奨だけ貰うってのはどうですか〜?」

「うははっ。それは良い考えじゃ!褒めてつかわす、七乃」

「はい〜。ありがたき幸せです〜」

こうして袁術並びに孫策の反董卓連合への参加は決定した。

その頃、劉勳はと言つと……………。

「ふふふ〜ん。今日もお嬢様の為に〜蜂蜜水を作ります〜」

厨房にて鼻歌混じりに蜂蜜水を作っていた。

「さて、出来上がりました。早くお嬢様にお持ち致しましょう」

と劉勲がお盆を持って、厨房を出ると……………。

「なんでも今度は反董卓連合とかいうのらしいぜ」

「ああ、聞いた聞いた。袁術様の従姉の袁紹様が発起人のやつだろ」

二人組の兵の話し声が耳に届いた。

ガシャンッ。

「は？…………りゅ、劉勲様！？どうかなされましたか？」

盆の上に乗っていた陶磁器の器が床に落ちる音で、兵は劉勲の存在を確認した。

「そ、その話は……………」

「は、はい？」

「その話は本当かって聞いてんだよッ！？」

いきなり兵の胸倉を掴んで問い詰める劉勲。

「は、はい！今、張勳様が袁術様にお伝えしている頃かと……………」

「チッ……………」

ヒュンッ。

風切り音とともに城の柱の一本がバラバラになる。

「あのクルクル巻きが……。お嬢様の従姉だから放っておいたが、まさか董卓ちゃんに手を出すつもりか！」

ヒュンッ。

また一本、柱がバラバラになる。

「蒼天に唾を吐くような悪行を……………」

顔には影がかかり、表情が読めないが、目だけが爛々と輝いていて、すれ違う者全てが息を飲む程の迫力だった。

「　　幼女は世界の至宝だぞ！？それに仇なすなど……。誰が許そうとも、この劉子台が許さん！！」

何故、劉勲が董卓が幼女であるかを知っているのかと言えば……………。

「全ての幼女の情報は常に密偵に探らせている」

劉勲直属の密偵部隊は今日も幼女を探して、大陸中を行脚しているのであった。

「……………かなりの数が集まっていますね」

劉勲は反董卓連合に集った諸侯たちを見る。

「……幼女の敵は全て、敵」

劉勲の後ろに兵が現れる。

軽装であることから、実践部隊でなく、諜報又は工作員であることが分かる。

ただ他とは違うのは黒一色でコーディネートされ、顔にも黒い布が被され、黒子の様な衣装であることだ。

「気持ちは分かりますが、今はまだその時ではないですよ、同士」

彼は劉勲直轄の密偵部隊の一人だ。

劉勲直轄密偵部隊。またの名を……………ロリコン幼女愛好部隊。大陸の幼女を陰ながら見守るのが彼らの使命だった。

「あら、珍しいわね。張勲と劉勲が共に居るなんて。城の方はいいのかしら?」

と兵の方を見ていた劉勲に声をかけてきた者がいた。

「これはこれはお久しぶりですね、曹操ちゃん」

それは曹操だった。

「まあ、基本的には僕は居なくても回っていきますからね。問題ありません。それより曹操ちゃんこそ軍議ではないのですか？」

「休憩よ。それにあんなものを軍議とは言わないわ」

心底疲れた様子の曹操。

「……………ああ、袁紹様ですか」

曹操の顔から大体の想像がついた劉勲は苦笑いを浮かべた。

「それにしても……………やっぱりそれは貴方の兵なのね」

曹操は劉勲の後ろに控えた黒子に目をやる。

「あ、はい。よく分かりましたね」

勿論、劉勲の諜報部隊は曹操の所にも送られている。

「まあ、情報とかを探るわけではないから放っておいたけど……………」

曹操は劉勲を見る。

「季衣や流琉に手を出そうとしたのはいただけないわね」

「……………ッ!？」

後ろに居た黒子がビクンツと肩を震わす。

「……………」

劉勲は無言で振り返り、黒子を見る。

「劉勲密偵部隊信条、第一条」

『幼女は宝である』

いつの間にか周りから黒子たちが現れ、声を揃えて言う。

「第二条」

『全ての幼女を慈しみ、愛せ』

「第三条」

『幼女は見守るもの、決して手折^{たお}ることは許さず』

「どうやら、同士の中から違反者が出たようですね」

劉勲は周りの黒子たちを見る。

「今すぐにその狼藉者を捕らえよ」

『はっ！』

「全ては幼女の為に」

『全ては幼女の為に！』

一系乱れぬ統率でその場から居なくなる黒子たち。

「大した統率ね。感心するわ」

「お褒めいただき、恐縮です」

ぺこりと頭を下げる劉勲。

「隊の秩序を乱す者は何人たりとも許しはしませんから」

「そう。………で、本音は？」

「僕に隠れて幼女とキャツキャツウッフなど許すまじー！」

「相変わらずのようで安心なんだが、残念なんだか………」

「そこで僕も曹操ちゃんとキャツキャツウッフしたいです！」

「そう。それじゃ私は軍議に戻るわ」

「あう。連れないですねー。だが、それもよし！ツンな少女もまた
よし！ー！」

声高らかに叫んでいる劉勲を余所に曹操は軍議が開かれている天幕
へと戻っていく。

（しかし、あの統率力は問題ね。今は方向性が偏っているからいい
ものを。もし、それが正規の方向に向かったら……）

戻る最中、曹操は考える。劉勲隠密部隊のことだ。

先程はああ言ったが、曹操がその姿を見たのは二回目だった。それは今しがたを入れて、二回目なのだ。

つまり、隠密部隊の者が許緒や典韋に手を出していなければ、曹操は隠密部隊のことを知ることはないと言い切れないが、それでも大分後のことになるはずだった。

それが偶々、そこに居合わせたのはただの幸運だった。それほどまでに隠密部隊は優秀な技量を持っているのだ。

（ただの袁術のお守り役ではないようね……）

「さて、どうやら軍議はまだまだかかりそうですし、僕は幼女でも探し……他の陣営の視察でもしましょうか」

スキップをしながら、陣内を歩く劉勲。

「確か、集まった諸侯は曹操ちゃん、袁紹、公孫賛、劉備に馬騰の所からは代理人が来ていたはず。後は有象無象でしたね」

一応、諸侯の情報は頭に入れてある劉勲。

「その中で幼女が参入しているのは曹操ちゃんに劉備。曹操ちゃんの所は今行くのは得策とは言えませんがね。ならば、向かうは劉備の陣営ですね」

直ぐさま情報を整理して、目的地を決める。幼女こじこつき関係の劉勲の頭脳は周瑜や諸葛亮にも劣らないとか……。

「さあ、待っていて下さいね、幼女さん！今、会いに行きます！」

「うりゃりゃりゃー！」

金属のぶつかり合う音が響く。

「ふ。相変わらず重い一撃だな、鈴々」

劉備の陣営内では張飛と趙雲が打ち合っていた。

「まだまだ行くのだ！」

「そう簡単には打たせはしない！」

張飛が更に追撃をかけようとするが、趙雲もただやられるばかりではなく、張飛が仕掛ける前に動き、突きを放つ。

「うにゃッ!？」

それを寸前のところで受け止める張飛。

「流石、鈴々。今を受け止めるか……」

二人の打ち合いを離れた所で見ていた関羽がそう呟く。

「鈴々ちゃんは大振りで隙があるように見えますけど……それを補う戦闘への勘がありますから……」

関羽の隣で鳳統がそう判断していた。

「確かに、な。あれは生まれながらにして戦いの才は群を抜いているからな」

自らのことを語るかのように妹分のことを語る関羽。

「はい。それに愛紗さんに星さんといった一騎当千の武将がいるからこそ、我が軍は数の少ない義勇軍ながらも大きな戦果を上げられています」

「それに朱里や雛里の知略の力も、な」

「あわわ………」

そう言って小さな軍師を見ると照れたように帽子のつばを押さえる様子を微笑ましく思う関羽。

「…………あ」

「どうかしたのか、雛里？」

「あ、その……あれ」

と鳳統が指を指す方を見ると、一人の男が張飛と趙雲に追いかけて回されている風景が目に見え込んできた。

そんなことが起きる少し前…………。

「さて、お互い体も温まって来たことだ。少し本気で行くつもりではな
いか、鈴々」

「望むところなのだ！」

二人は得物を構え直して対峙する、が…………。

「…………」

『…………』

二人は自分たちへ向く視線に気づき、目をそちらに向けると文官の

服、腕に『袁』の文字の入った腕章を着けた男が居た。

より正確に描写するなら、その男は地面に寝転がり、張飛の後ろからローアングルで見上げていた。

「うん？何かな？あ、これ？いや、最近この下着に魅力を感じ始めてね。ついつい目を奪われてしまうんだよ」

男　劉勲は二人の視線ににやかに答えるが、その体勢からは一切動こうとはしなかった。

「にや？お兄ちゃん、誰なのだ？」

「はふっ！？」

張飛が首だけ振り返りながら聞くと劉勲が悶えた。

「よ、幼女にお兄ちゃんって言われちゃった……………まさに天国……………」

「……………鈴々」

「うにや？なんか分からないけど、了解したのだ」

まだ悶えている劉勲をさておき、二人は目配せをすると、得物を振り上げ、叩きつける。　　劉勲へと……………。

「うなっ！？緊急回避！ただ幼女への視線は外さない！！」

それを転がりながら避ける劉勲。言葉通り張飛のスパッツから一切目を離しはしなかった。

「……ふう〜。危ない危ない」

そして、起き上がると服に付いた土を払う。

「こんにちは、幼女さん。僕は決して怪しい者ではありません。ペロペロさせて下さい！」

「弁解しているのか、白状しているのか、どっちなのだ？」

「何を言っているんですか、貴女は。僕はただの幼女愛好者として当然の挨拶をしたまでです」

趙雲の言葉に普通に返す劉勲。ただ、この場合の普通は劉勲にとっての非常識であるが……。

「とりあえず不審者であることは分かった。捕まえるぞ、鈴々！」

「おう、なのだ！」

「なんてことだ……幼女が自ら僕に飛び込んでくるなんて夢のよ……うわあっ!？」

張飛の剛撃を間一髪でかわす劉勲。

「あ、愛が重いとは正にこのことか……」

「それは違うと思いますぞ」

趙雲の正確なツツコミが入る。

「ねえ、星？鈴々にはこのお兄ちゃんが悪い人には見えないのだ」

「鈴々よ、“悪い人”には色々な種類があつてだな。鈴々の思う悪い人とは違う悪い人なのだよ」

趙雲は再びお兄ちゃんと呼ばれ悶えている劉勲に目を向けて言う。

「ううゝ、よく分からないのだ。鈴々は難しい話は得意じゃないのだ！」

頬を膨らませる張飛にそれを見て瀕死寸前の劉勲。

どうやらいつもは袁術や荀正といったタイプは見ているが、張飛というタイプの新しい刺激は想像以上だったようだ。

嬉しそうな笑顔でその場でピクピクしている劉勲に張飛は不思議そうに見下ろし、趙雲はこれをどうしたものかと首を捻っていた。

倒れた劉勲の近くには『元気っ娘、万歳』の文字が残されていたとかいないとか……。

11話 幼女に悪い奴はいない（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

12話 駆除する益虫（前書き）

時間を見つけて、ちよくちよく書き上げました。

12話 駆除する益虫

「それでこの者はどうするのだ？」

簀巻きになった劉勲を見下ろして趙雲は言う。

「ふへへ」

未だに劉勲は天国^{ヘブン}状態だった。

「ここに居るということはこの連合に参加している諸侯の者だと思
うのだが……」

「おそらくそうだと思います……」

関羽の意見に鳳統が頷く。

「いや、もしかしたら連合に紛れ込んだただの変態かもしれん」

「まあ何にせよ、この者が戻ってきたら話を聞くべきか……」

と一同はまだまだ悶え続ける劉勲を見下ろす。

『……………』

「フヒ、フヒヒ……」

あれから一時間程経ったが、戻ってはこない劉勲。

「流石にそろそろ起きてもらわねば困るな」

趙雲は未だに起きる気配のない劉勲に困ったように言う。

「仕方あるまい。この策はあまり取りたくはなかったか……」

と趙雲は近くにいた関羽のスカートに手をかけ　　。

「秘技、神風!!」

捲った。大いに捲った。それは豪快に捲った。

「ッ！？な、なな、何をするのだ、星！！」

「いや、こうすれば世の男というものは目を覚ますと思ったのが……残念であつた」

結果としては劉勲は起きず、やれやれと首を振る。

「何故、私に非があるような目を向けるのだ？」

「いや、別に他意はないよ。私もやって見せようか？」

趙雲は自らの裾を摘まんでみせる……と、その時本当の神風が吹く。

そこは流石は武人。鋭い反射神経で裾を押さえた関羽と趙雲。張飛はスカートではなく、スパッツなので問題はない。

問題があつたのは……。

「ひゃあ！？」

軍師、鳳統だった。風から帽子を守ろうとして頭を押さえてしまい、風をもろに受けたスカートが捲り上がり、その清楚な下着が丸見えとなる。

「ヤッホーイ！！幼女の下着！！」

そして、タイミングを逃さない男　劉勲、覚醒。

『……………』

関羽と趙雲が冷めた目で劉勲を見る。

「ふー。良いものが見れた」

劉勲は既に鳳統がスカートを押さえた為、目を離して地面に寝転がり、目を閉じてフヒヒと笑う。

つまり、今まで狸寝入りだったのだ。

「……………おい」

低い声で劉勲を呼ぶ関羽。その表情はまさに般若。後ろには怒りのオーラが見てとれる。

「……………起きろ」

「……………」

呼び掛ける関羽にそれを無視する劉勲。

「……………」

「……………」

ザシュッ。

「ひゃわー!?」

無言で降り下ろされた偃月刀を寸前で避ける劉勲。

「な、何をするのですか、貴女は！？いきなり切りつけるとかこの切り裂き魔ですか！？」

「いつからだ？」

「はい？」

劉勲の言葉を見無視して関羽は言う。勿論、得物は構え直されて刃は劉勲へと向けられている。

「いつから起きていたと聞いているんだ！」

劉勲の鼻先に刃を向ける関羽。

「ひゃい！？ええと……ああ。大丈夫ですよ」

顔が赤くなっている関羽を見て、合点がいった劉勲は言う。

「僕は幼女の下着しか興味ないですかひゃい！？」

言葉の途中で刃が突き出される。

「忘れろおおお！！！」

「うなあああ！！僕は幼女以外に追いかけられる趣味はありませんよ……！」

脱兎の如く劉備の天幕から逃げ出す劉勲。

「結局、あの者が何者が聞きそびれてしまった……………」

逃げる劉勲に罵倒している関羽を横目に趙雲が呟くのだった。

「はあはあはあ。ヒドイ目に遇いました……………」

「あれー、七々さん？どこかお出掛けだったんですかー？」

「七乃さんに……………お嬢様！お疲れ様です！軍議の方はもうお済みで？」

ヘトヘトになって戻ってきた劉勲は陣の入り口で袁術と張勲と会う。

「うむ、ようやく終わったのじゃ。妾は疲れたのじゃ。七乃、七々、蜂蜜水を用意するのじゃ」

『はい、お嬢様』

「で、先鋒は義勇軍の劉備さんとそのご友人の公孫賛さんが務めると……？」

「はいー、今日の軍議で決まったのはそんな感じですね」

張勳から今日の軍議の内容を聞く劉勳。

どうやら泗水関への先鋒は弱小であることの弱味につけ込まれた劉備とそれを助けるために公孫賛が志願したらしい。

「馬騰の代理の馬超とウチが中で曹操さんと袁紹様が後ろと……。これまた破茶滅茶な陣形ですね」

ため息を吐く劉勳。籠城戦は攻める側には相手の3倍以上で当たるのが一般的だ。それを連合で最も兵の少ない義勇軍に任せるなど考えられないのだが……。

「ああ。他の人は言うことを聞かなかったわけですか……」

と劉勳は机に置かれた命令書を摘まみ上げる。

そこには『華麗に、雄々しく、勇ましく』とだけ書いてあった。流石の劉勳もこれが作戦内容だと判断するのに時間を要した。

「はいー。それで権力を振りかざして半ば強引に劉備さんに先方を押し付けていましたよお」

「全く。そういうのはお嬢様がするから可愛いのであって、他の方がしても鬱陶しいだけですけどね」

「全くですねえ」

袁術至上主義の二人だった。

「ふむ。確か泗水関に詰めているのは神速と謳われる張遼さんとか……かか、華なんとかさんでしたね」

「正直、無理ですよ、これ。巻き添えにならないように軍を下げちゃいますか？」

「まあ、それもアリで。後は孫策さんたちに前に出てもらいましょう」

「そうですねえ。戦いたい人に戦闘は任せておきましょう」

張勳と劉勳はお互いに腹黒い笑みを浮かべる。

「……………で、ちょっと前線に出たいのよ」

前線で劉備と公孫賛が接敵してから幾分か経った頃、袁術の下に孫策がやって来た。

「なんか劉備たち手こずってるみたいだし。そこに袁術ちゃんの兵を引き連れた私たちが行って瞬く間に泗水関を落としたら、どうかしら?」

「……………うむ?七乃、どうだと言っのじゃ?」

孫策は分かりやすく言ったつもりだが、袁術のおつむは遙か斜め下だった。

「ええとですね。……………お嬢様、最高おっつて感じですよ」

「そうなのかえ!?!良いぞ、孫策。妾のために働いてまいれ!」

上機嫌に許可を出す袁術にそれを笑顔で見る張勳。孫策はそれだけ聞くと早々と帰っていった。

そして、それから少し時間が経った頃。

「も、申し上げます!」

袁術軍の兵が天幕に入ってくる。

「どうかしたんですか?孫策さんたちが泗水関を落としたんですか?」

「い、いえ、それが……孫策軍がこちらに後退してきます。しかも、後ろには敵軍勢が張りついていて……。このままでは我が軍に雪崩れ込んでくるかと」

「な、何をしておるのじゃ、孫策は！？七乃なんとかせい！」

「ええ！？私ですか！？こういう時は七々さん、お任せし……。あれ？七々さんは？」

袁術の命令を劉勲に流そうとしたが、天幕にいたはずの劉勲の姿が見当たらなかった。

「さあて、いつも無茶苦茶言ってくれる袁術ちゃんにちよつと意趣返しよ」

孫策はわざと敵兵を釣り、袁術に擦り付け、その隙に敵将を討ち取る策に出たのだ。

だが、孫策は忘れていた。袁術軍にはそういった策を最も得意とする文官が居ることを……。

「全く。お嬢様の陣に土足で侵入しようなど不届き者もいたものですね」

そこには兵を率いた劉勲が立っていた。

「知らないようなら教えてあげましょうか？」

劉勲の声は孫策軍、そしてその後ろには着いてきた華雄軍の耳に届く。

「ッ！？全軍左右に別れなさい！」

孫策は何かを感じ取り、全軍を左右に退避させる。

「幼女の休息を邪魔する者は槍に貫かれて死ぬのですよ？」

劉勲が手を上げると兵が一齐に盾を構え、槍を突き出し、槍衾を作る。

「弓兵、放て。当てなくてもいいです。まずは馬の足を止めなさい」
槍兵の後ろに控えた弓兵が弓を放ち、大量の弓が前方へと飛んでいく。

劉勲軍が孫策軍で見えていなかった華雄軍の兵たちに動揺が広がる。突然現れた槍衾と自分たちに飛来してくる矢。

だが、そこは猛将華雄率いる軍。直ぐに馬の速度を上げて、矢を回避しようとする。それが目の前で笑う文官の手のひらの上であることも知らずに……。

「言いましたよね？槍に貫かれて死ぬのです、と……」

再び手を上げると、華雄軍へとあるものが飛来する。それは矢ではなく、“槍”だった。

槍袈で前に突きだされていた槍の内に半分が飛び出し、騎兵部隊に向けて飛ぶ。

矢よりは遅い槍だが、速度を上げた騎兵部隊には十分避けることの出来ない速さだった。

「……何なのよ、あれ？」

「どうやら兵の後ろには槍を射出する装置を置いていたようだな」

孫策は目の前の光景を見ながら呟くと周瑜が答える。

「槍を射出するって……そんなこと可能なの？」

「可能だ、理論上はな。ただその装置にはかなりの金が掛かるのだ」
それを1つ作るのに莫大な資金が掛かる。故にそれを実用化させるものも少なかった。

「お嬢様の財力があってこそ出来る策ですね」

「劉勲！？いつの間に！？」

二人の後ろにいきなり現れる劉勲。

「たった今ですよ、孫策さん。そんなことよりさっさと敵將を討ち取って下さいね」

「そんなの自分ですればいいじゃない。それに私たちは貴方のせいで被害を受けてるのよ？」

孫策の勘で甚大な被害は間逃れたが、それでも少なからず軍には被害が出ていた。

「孫策さん、何を言ってるんですか？」

劉勲は不思議そうに首を傾げる。

「敵將を討ち取るのは孫策さんの役目ですよ。僕の役目はお嬢様に害する者の排除ですよ」

劉勲は笑顔で言うが、目が笑っているようには見えなかった。

「ねえ、孫策さん？貴女はお嬢様に害なす者じゃないですよね？」

「……え、ええ、勿論よ」

「ああ、良かったです。流石、孫策さん、頼りにしていますよ。それでは僕は後ろで見守っていますので」

そう言って劉勲は自分の部隊に戻っていく。

「何が頼りにしてる、よ……。あれが見守る？」

孫策は後ろを見る。そこには槍袈を展開したままの劉勲隊が待機していた。

「どう見てもあれは脅しじゃない……」

もし、少しでも袁術の陣に近づこうものなら孫策軍ごとその槍が貫こうとするだろう。

隊の中央でこちらを見ている劉勲に孫策は舌打ちをする。

「雪蓮、お前の想いも分かるが今は目の前の敵に集中してくれよ」

「分かってるわよ。この戦は何としても勝ち残らなきゃ……。蓮華や祭があっちで頑張ってるんだもの」

「そうだ。我らの悲願はもうそこなのだからな」

「ええ。見てなさいよ、袁術ちゃん。それに劉勲……」

決起の時は直ぐそこまで迫っていた。その時、劉勲の決断は如何に。

12話 駆除する益虫（後書き）

次回、再び奴がやって来る！！

いつ更新できるか分からないけどね！

ご意見、ご感想お待ちしております。

13話 その名を呼ぶのは……（前書き）

さあ、皆様お待ちかね。あの人が再登場です！

13話 その名を呼ぶのは……

泗水関は表向きは孫策の策により華雄は討ち取られ、張遼は虎牢関へと後退したことにより難なく抜けることができた。

だが、残す関 虎牢関。これが問題だった。

その関自体が堅牢であり、何よりもそこに詰めるのは天下の飛將軍、呂布である。

そして、それに当たるのは袁紹、曹操だった。先の泗水関での戦いで劉備、孫策に手柄を取られたことを面白く思わなかった袁紹が大軍を率いて虎牢関へと向かったのだ。

「自分で命じておきながら、それを不満に思っ……」

劉勲は前で押されている袁紹軍を見ながら呟く。

「どうやら曹操ちゃんは初めから袁紹さんに呂布を押し付けるつもりだったみたいですね」

曹操たちは真つ先に張遼軍を囲みだした。厄介な呂布は袁紹に押し付け、自分は張遼を得ようとしているのだ。

「どうやら孫策さんは“今回”は前に出ないみたいですし、僕もゆっくり観戦しますか……」

劉勲は自分たちの少し前に布陣した孫策軍を見る。

「とは言え、張遼も呂布も好み^{ロシ}ではないですから、見ていて楽しいとは　ッ!？」

劉勲は言葉の途中で目を見開く。その先には袁紹を助けに劉備が軍を動かしていた。

「くつ。まさか我ら三人ですら倒せぬとは……」

呂布を止めるために関羽、張飛、趙雲の三人が向かうが、呂布は軽々と三人をあしらう。

「……お前たち、強い。……でも、負けない」

「だが、我々として負ける気は更々ない」

そう言う趙雲に呼応し得物を構える関羽と張飛。

そこに乱入者が現れる。

「恋殿をいじめる輩はこのねねが許しませんぞー!」

それは張飛よりも更に幼い少女。呂布の軍師、陳宮だった。

「ちびっこは後ろに下がっているのだ」

「なんですとー!お前もちびっこではないですか!?!」

「鈴々は小さくても強いからいいのだ」

「うめぬ。こうなればちんきゅーきつくをお見舞いしてやるのです」

「……ねね、下がる」

「恋殿」

安い挑発に乗る陳宮をひょいっと掴むと後ろに下げる呂布。

再び戦いが始まろうとしたその時、再び乱入者が現れる。

「天呼ぶ。地呼ぶ。人が呼ぶ」

砂煙を巻き上げて、現れる乱入者。

「少女の悲鳴を耳にして、光の如く現れ、お助けします！！その名は」

砂煙が晴れてくるとその者の全貌が見えてくる。

『変態だああああ！！』

「それは誉め言葉だ。我が名は愛と自由の使者、全裸仮面！ここに推参！」

そこには顔に巻き付けた布以外何も身に付けていない男が立っていた。

顔に巻いた布の余りが風に靡いて、いい具合にナニを隠している。

「な、何者だ、貴様！？」

「にゃ？真っ暗なのだ？」

「鈴々にはまだ早いからな」

顔を真っ赤にする関羽に張飛の目を覆う趙雲。

「聞いていなかったのか、関羽？我が名は全裸仮面だ」

悠然とポーズを決める全裸仮面。動いても男のシンボルだけは布で隠れている。

「新手の伏兵か？」

「心外ですぞ！そのような変態、ねえたちの軍にはいないのです。そっちこそねえたちを動揺させる作戦ではないのですか！？」

趙雲が首を傾げて言うと陳宮が両手を上げて憤りを示す。

「待て待て。私を取り合つての争いは止めなさい」

『誰が取り合つてなどいるか！！』

もう既に場は全裸仮面に持つていかれて、戦いどころではなくなっていた。

「いやはや、このような所でお嬢様並の幼女に出会えるとは………正に奇跡！」

両手を天に挙げて、喜びを示している全裸仮面。

何故、全裸仮面は陳宮の存在を知らなかったのか？

それは劉勲隠密部隊の気配を呂布が感じ取り、牽制していたのだ。

呂布の野生の勘は侮れないのだった。

「フッフ。今日はなんと良い日か……」

「ヒイ！？ち、近づいて来るなです」

「何を怯えているのだい？」

近づく全裸仮面に全力で拒絶する陳宮。

「そんなの裸だからに決まっているのです！！」

「では、逆に問おう。何故、君たちは服などで自らの体を縛っているのだい？窮屈ではないのかい？」

然も当然の如く問う全裸仮面だった。

「そんなことあるわけないのです！」

「全く……理解できないとは可哀想な……」

「何故、哀れみの視線を向けるのですか！？」

スゴく楽しそうに話す全裸仮面だった。

「フハハハッ。さあ、これから私の時間の始ま

」

「見つけました、紀霊様！」

「よくやりましたわ、荀正」

「げっ！？紀霊さん！？」

そこに現れたのは袁術軍、武官筆頭の紀霊が率いる隊だった。

「見つけたわよ。貴様、またしてもそのような不埒な格好を……………」

怒りに肩を震わせる紀霊。

「…………何か用ですか？どうやら私を誰かと勘違いしているようです
ね」

「私の名前を呼んでおきながら、今更言い逃れはできないわよ」

「…………ちっ」

「さあ、全員、あの私たちの国の汚点を肅正を！」

『応っ！！』

「ちよつと待てッ！？ウチの隊員も混ざってませんか！？」

ちらほらと見える黒子たちを指さす劉勳。

「何故、貴方たちまでそっちなのですか！？普通こっち側でしょ！
？」

「隊長だけ何時もズルい」

「俺たちは影から見るとしかないので、隊長はいつでも堂々と会いに行ける」

「そういえば泗水関の前にも劉備陣営に行つて張飛ちゃんと鳳統ちゃんとキャツキャツしてたつて」

「しかも鳳統ちゃんの下着を見たとか」

「まさか鳳統ちゃんの恥じらい姿を至近距離で、だと」

「荀正ちゃん、ハアハアハア」

『よろしい、ならば戦争だ』

同好の士の中でも争いは起きるのが常だった。ちなみに最後に発言した者はこの後、紀霊からお説教フルボッコされました。

完全なる私怨により劉勲隠密部隊は劉勲に矛を向ける。

「くつ。ここは名残惜しいが一時退却を……………」

「させると思っているのですか？」

劉勲をじわりじわりと囲んでいく全裸仮面包囲網。

「ふ、甘いですね。この程度でこの僕を捕まえたつもりなら…………片腹痛いですよ」

丸腰の（正に全裸であるため）劉勲は不敵に笑う。

「油断するな！アイツなら腕から槍を出すことぐらいやってのけるかもしれない」

「いや、流石に僕もそこまで人間辞めてないですから……」

確かに手管を得意とする劉勲だが、流石に人間は辞めていなかった。常識はぶち破っているけど……。

そして、不敵に笑っていた劉勲は明後日の方向を見て言う。

「あ。お嬢様が蜂蜜でベタベタになってる！」

「いや、流石にそんなベタな手に引っ掛かるわけが……」

関羽が呆れたように呟く、が……。

「何ッ！？どこだ、どこだ!？」

「いつもは張勳様に取りられてしまうが、今度こそは！」

袁術軍全員が明後日の方向を向いた。袁術軍の兵はいつでも己の欲望に忠実だった。

「今の内に戦略的撤退！さらば!!」

こうして虎牢関の戦いは劉勲と袁術軍の乱入で有耶無耶となり、その隙に曹操は張遼を手に入れ、呂布たちは逃走していた。

「ふう。ここまで来れば問題ないでしょう」

虎牢関から少し離れた森の中に予め隠しておいた衣服を取りだし、着替える劉勳。

「…………貴方、何してるのよ？」

「きゃあ！？ちょ、ちよつと孫策さん何ですか！？着替え中ですよ！」

「反応が違うと思うんだけど…………」

孫策は呆れたように言う。

「まあ、定番ってやつですよ」

「それに今まで裸で戦場に立ってた人が何を言ってるのよ」

「はて？何のことでしょうか？僕はずっとここに居ましたよ」

しらつとした顔で囁く劉勳。

「まあ、私には関係ないことだからいいんだけどね……。で、幼女に会えた感想は？」

「それはもう最高でしたよ！！」

輝く笑顔の劉勲。

隠さない、自重しない、躊躇わない。そんな信条の劉子台だった。

「……………貴方、何でそこまで幼い子が好きなわけ？袁術ちゃんだけでなく見境ないわね」

「……………」

「なんで黙るのよ」

いつもの軽口が返ってくると思っていた孫策は無言の劉勲に拍子抜けする。

「うーん、なんと言いますか……………。僕は少女が好きなわけではなく、少女以外が好きでないのですよ」

「少女以外が好きでない？変に回りくどいわね」

「そうですね。僕もそう思います。言い方を変えますとある程度の年齢の女性を見ると母親を思い出すのですよ」

少し笑う劉勲。そこには寂寥を感じ取られた。

「僕の母親は若くして僕を産みましてね。僕が物心ついた時の母親は丁度、孫策さん貴女程の年齢でしたね」

「何？その歳で母親が忘れられないの？」

「まあ、ある意味忘れられませんか」

と劉勲から感情が消える。表面的には変わっていないはずなのに、印象ががらりと変わる。

「若くして僕を産んだ母親はそれから育児に家事にと毎日を休む暇なく働いてました。その頃はまだよかったですよ」

一瞬だけ遠くを見つめる劉勲。

「僕が大きくなり、次第に心休まる時間が増えてくると思い出してしまうのですよ」

劉勲の語りに孫策は一切の合いの手や横やりを入れない。いや、入れることができなかった。

「いえ、気がついてしまうんですよ。何故、自分はこうも苦勞しなければいけないのか。周りの同じ年代はああも楽しげにしているのに、と……」

だから、となんでもないことのように劉勲は言う。いつもの軽口を口にするように言う。

「その原因である僕に憎しみが向くこともあるわけですよ」

「そんな……」

「僕の真名、覚えてますか？」

「ええ」

「七々。勿論、母親が付けた真名なんですけどね。七と七を掛け合わせた名前。七を7つで49。“死”に“苦”しむようにと呪詛を込められた名前。それが僕の真名なんですよ」

いつもと変わらない笑みを浮かべている劉勲。それが逆に違和感を感じる。

「これ以上に強い想いを込めた真名はないですよね」

ニコリツと笑う劉勲だった。その笑顔に嫌な汗が背中を流れる孫策。目の前の男は本当に今まで知っている劉子台なのか。そんなことを思ってしまうほどにその笑みは恐ろしかった。

「まあそのせいで若い頃はやんちゃしてましたけどね」

「貴方……………苦労して」

「なんてことがあったら良かったのにね」

「……………は？」

雰囲気が一変していつものふざけた空気が劉勲を包む。

「そんな悲劇的な過去なんて早々にあるわけないんですよー」

ケラケラと笑う劉勲。

「え？今までの話は？貴方のお母さんは？」

「はい？母親ですか？仲良いですよ。多分、今日も可愛い男の子を追いかけて大陸中を駆け回っているはずですよ」

劉勲がロリコンであり、そしてその母はショタコンだった。

劉勲の一族は血統書付きの変態家系だった。

13話 その名を呼ぶのは……（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

14話 その愚かな男たちは……

「どうも、曹操ちゃん、こんにちは！遊びに来ました！！」

「……………」

曹操の天幕に堂々と入ってくる劉勲。

「あれ？曹操ちゃん、元気がないですよ？頭を抱えてどうしたのですか？あ、もしかして月の日ですか？あれ？皆さんどうして得物を構えているのですか？そして何故、僕に向け　　みぎゃああ！！！」

「……………で。何しに来たのかしら、劉勲？」

「はい。遊びに来ました」

ボロボロの劉勲は最初と変わらない笑みを浮かべて言う。ちなみに周りには殺気立った魏の忠臣たちが囲んでいる。

「貴方はいつもそうよね」

「ハハハ。僕は僕ですからね」

呆れたようにため息を吐くのをにこやかに笑いながら言う劉勲。

「僕は幼女のためなら火の中、水の中、であります」

「時々、貴方の行動力が恐ろしくなるわ……………」

「え？僕は別にお風呂や廁を覗いてないですよ？」

『……………』

冷やかな目線が劉勲を刺す。

「なッ！？まさかの誘導尋問！？流石は曹孟徳！！正に脱帽とはこのことですね！」

と劉勲は自分の頭に手を置く。そこには帽子はなく、髪の毛があるだけなのだが……………。

カパッ。

『 ツ！？ 』

その髪の毛が取れる。その下からツルツルとした頭皮が見える。それを見て、魏の全員が息を飲んだ。

「あ、貴方……その頭………」

「まあ、嘘なんですけどね」

カポッと頭皮が取れる。つまり二重ズラだった。

「あはははっ。曹操ちゃん、いい顔だったよ。あれ？皆さん、得物を構えてどうかしましたか？何で無言で詰め寄るのですか？それ、本物ですよ？人に向けると危ないって知ってますよね？」

ジリジリと詰め寄る魏の面々に笑みを浮かべたままの劉勳。

「まあ、楽しい時間を過ごすのはやぶさかではないんですけど、そろそろ本題に入りたいところなので」

殺取『むしな當郎』

『 ツ！？ 』

劉勳を囲っていた得物が全て弾かれる。

「ちょっと真面目な話をしましょうか、“曹孟徳殿”」

にこやかに笑っていた表情は引っ込み、平坦な顔が浮かぶ。

「……………何かしら？」

曹操もそれを受け止め、答える。

「一つ、仮定の話をしましょう。もし、なんの罪もない純真無垢な少女が大陸中から敵意を向けられ滅びゆくとしていて、貴女に助けを求めてきたらどうしますか？」

「まさかアンタ、月のことを……………！？」

劉勲の話に食いついたのは捕虜として曹操に降った張遼だった。

「孟ちゃん……………」

張遼は今の主を見る。

「もし、そのような者が居たとしたらどうしますか？」

「私に“利”があるなら助けるわ」

徹底した現実主義。それが曹操の信条である。

「利がなければ見捨てると？」

「ええ。そのように他人に利用される者なら遅かれ早かれ淘汰されるわ。私は臣下の、民の命を背負う王よ。感情で、私情で兵を、国を揺るがすことは決してしない」

「……………そうですか」

「貴方はどうなの？そういう者を保護するの？」

逆に曹操が劉勲に問う。張遼も劉勲を見る。希望の込めた瞳を向ける。

「　　しませんね」

そして劉勲はきっぱりと否定する。

「あら、意外ね。貴方の趣味からして大陸を敵に回してでも保護するとおもっていたのだけど……」

「ええ。僕は少女、幼女のためなら大陸全土を敵に回してもいいと思っていますよ」

「なら、何故かしら？」

「だって　　滅ぶ国に迎え入れても意味無いですから」

さらりと口にする劉勲。

「僕は助けます。でもそれは一時しのぎでは駄目です。助けるからにはその少女が一生幸福でいられる環境の元でなくてはいいけません」

だから、劉勲は己の元に来た少女を故郷に帰した。袁術の治める国はいつか滅ぶと知っているから……。

「貴方は袁術が滅ぶと思っているわけね。ただの盲信者かと思えば意外と考えているのね」

嬉しそうに口の端を上げる曹操。臣下たちはその笑みを知っている。ついこの間、張遼を捕虜にしようと決めた時にも同じ笑みを見ていた。

「いいわね。もし、袁術が滅んだら私の所に来なさい。末席に加えてあげるわ。それとも　私が今から袁術を滅ぼして貴方を手に入れようかしら……」

曹操としてはただの冗談のつもりだった。だが、相手を見誤っていた。いや、よい人材発見に気分が高揚していたのかもしれない。だから……。

「　」
「」冗談を「

目の前に瞳孔の開いた眼が現れる。それが劉勲のだと気づくのは嫌な汗が流れ出るのと同じだった。

一瞬で間合いを詰めた劉勲は曹操の目をその瞳孔の開いた眼で見る。

「生憎と曹操殿は僕の好みではありませんが、お嬢様程ではありません。もし、お嬢様に害為すおつもりなら 排除しますよ？」

「……………貴方。自分の言葉が矛盾しているのは気づいているかしら？」

「はい？矛盾なんてしてませんよ？」

パチリと瞬きをすると開いていた瞳孔は閉じて、纏う雰囲気もいつものものに戻っていた。

「お嬢様をお守りすることと国が滅ぶことは矛盾しません」

のほほんとした雰囲気の中に芯があつた。

「さて、それでは僕は帰りますね」

「貴様ツ！？ただで帰れると思っているのか！！」

数々の無礼にご立腹な臣下たち。

「あれ？なんですか？でも、残念ですねー。貴女たちが幼女だったら大歓迎ですが……………」

すると劉勲の周りに黒子たちが現れる。

「生憎と僕はお嬢様のお世話がありますのでこれで失礼させていただきます」

黒子に守られた劉勲に手出しが出来ずにただ見送ることしかできな

かった。

「……………？どこかしましたか？行きますよ？」

劉勲が歩き出そうとしたが黒子たちが動こうとしなかった。

「隊長はまた可愛い少女とイチヤイチャと……………」

「あんなに顔を近づけて……………」

「接吻を……………」

『ッ！？』

黒子の一言に他の黒子たちが一斉に劉勲を見る。いや、睨む。

「いやいや。貴方たちは何を言っているんですか？」

『よし。私刑だ』

じゃらりと重い鎖の付いた拷問器具を取り出す黒子たち。

布で顔は隠れているにも関わらず、黒子たちからはギラギラとした視線を感じた。

「え？あの、ちょっと……皆さん？」

「隊長。今までありがとうございました。俺たちアンタの下で働けたことは一生忘れねえよ」

「ああ。アンタは最高の上司だったぜ」

「お前ら……その拷問器具を持ちながら言っても何の説得力も無いですよ」

『さあ、後は俺たちに任せて先に逝ってくれ』

「全然いい感じにまとめてないから！お前らのそれは忠誠心とはかけ離れた欲望だから！」

ジリジリと間合いを詰める黒子たち。

「くっ……あ、あんな所に幼女が……！」

「同じ手が何度も通用するわけが」

「華琳様ー、残りの兵糧の報告に来ました」

と丁度いいタイミングで許緒と典韋がやって来る。

「あれ？なんだかお取り込み中でしたか？」

二人は中の様子を伺うように入り口で立っていた。

『うおおおおー!!』

突然に雄叫びを上げる黒子たち。

「本物の許緒ちゃんと典章ちゃんだ!!」

「マジ小さい!マジ幼い!マジ愛でたい!!」

「幼い体で勇猛に戦う姿はマジ神!俺、あの姿を見るためならあの鉄球に突っ込めるわ」

大興奮な黒子たちだった。

「うん?何か忘れて……………はっ!隊長は!？」

黒子の一人が本来の目的を思い出し、劉勲を探すが、そこには
。

「うはっ!マジいい幼女っぷり!馬鹿可愛いお嬢様もいいけど元気
っ娘や純情っ娘も捨てがたい!どっちかを選べなんて僕には出来な
い!否!選ぶなんて不粹を行うことが愚行!」

黒子と共にヒートアップした劉勲が居た。

「……………アンタ、マジでウチらの隊長だわ」

劉勲、折角のチャンスを棒に振る男だった。だが、彼は後悔はしな

い。それが彼の生きる道^{ロウコン}なのだから……。

「チツ。不覚……」

黒子たちにより縄でぐるぐる巻きにされた劉勲は舌打ちをする。

「さあ、隊長。お覚悟はよろしいですね」

「何故に断言した！そこは嘘でも聞くべき所だ！」

「さあ、生き埋めと火炙り……どちらにしますか？」

「何故に死刑に！？さっき私刑って言ってたのに！？」

「ああ、すみません、間違えました。 どちらを先にしますか？」

「更におかしくなっただけ！？」

着々と二つの準備を始めていく黒子たち。

「……………分かりました。僕も貴方たちの隊長です。自ら罰則から言い逃れをしようとはしません」

(どの口がそんなことを……………)

散々逃げてきた劉勲に黒子たちは思う。

「そこで僕から貴方たちに最後の一言を送ろうと思うわけです」

劉勲はぐるりと黒子たちを見渡す。

『……………』

全員が固唾を飲む。そして、劉勲が口を開く。

「ぶっちゃけどの少女が一番なわけ？」

ニヤリと劉勲が笑う。

「そんなのは決まっているだろ……………」

「そりゃそつだ」

そして黒子たちは声を揃えて、その名を口にする。

「袁術様」「張飛ちゃん」「許緒ちゃん」「典韋ちゃん」「荀イクちゃん」「諸葛亮ちゃん」「鳳統ちゃん」「曹操ちゃん」「孫尚香

ちゃん」

様々な名前が飛び交った。

「おい！テメエ、何言つてやがる！どう見ても袁術様が一番だろ！
！」

「馬鹿かお前は！？幼女といえば元気に走り回る姿こそ究極なんだよ！！故に張飛ちゃんが一番に決まってるんだよ！」

「馬鹿はお前だ！元氣っ娘なら許緒ちゃんだろが！！」

「ハッ。お前らまだまだ幼女を理解していないようだな。一番の幼女といえば典韋ちゃんだろ！なんせお嫁にしたい幼女番付で首位だぞ！毎朝朝ごはんを作るその姿だけでご飯三杯はいける！」

「お前こそまだまだだな。元氣っ娘？純情っ娘？この馬鹿共が！！
ツンっ娘が一番に決まってるんだろ！！俺なんか魏に来たら荀イクちやんの罵倒聞いてからじゃねえと仕事に身が入らねえよ」

「だからお前は駄目なんだよ。ツンっ娘って言えば曹操ちゃんだろ？何も喋らずともその雰囲気だけで俺はもう！」

『自重しろ、この変態』

「なッ！？お前らだって変わらねえだろが！！」

ガヤガヤと騒がしく討論を繰り広げる黒子たち。同士といえどもその趣向は千差万別。時に食い違いが発生するのは当たり前だった。

「あれ？隊長、どこ行つた？」

「ハッ！まさか、これを狙つて！？」

そしてそれが劉勲の思惑であつた。

「……………はあ。なんなのよ、これ」

曹操は目の前の茶番に頭を押さえる。

「季衣、ちよつとこつちへ来てちようだい」

「？」

許緒は言われた通りに曹操の下にやつて来る。

「ちよつと今から言うことを言ってもらえるかしら？」

「え？はい、分かりました」

許緒に耳打ちして、何やら言う曹操。

「？そんなことでいいんですか？」

「ええ……………」

「ええと……………し、白くてベタベタなものが顔にかかつちやつたよ
お」

バツ！？

口論をしていた黒子たちが一斉に許緒を見る。鼻息が荒いのは口論のせいか……。

そして。

「え？どこ？どこ？許緒が白濁した液体に汚された姿は？」

地面から顔を出した劉勲が居た。

「劉勲……貴方ね、勝手に陣内に穴を掘るのは止めなさい」

「あ、曹操ちゃん」

呆れたように側に立っている曹操を見る劉勲。

「あ、この角度からだと曹操ちゃんの下着が丸見え」

ザクッ。

「何か言ったかしら？」

「イエ、ナニモ」

目の前に刺さる鎌を見て、首を横に振る劉勲。

「貴方たちいつまでウチの陣内でくだらない茶番を続けるつもりなのかしら？」

「いやいや、僕らはいたって真剣なんですけど……。真剣に少女の

素晴らしさを世界に伝えて
」

「戯れ言も聞き飽きたのだけれど？」

有無を言わさぬ覇気を纏った曹操が劉勲と黒子たちを睨む。

「さて、そろそろお暇させていただきましょいか」

『了解です、隊長！』

迅速に片付けを行う黒子たち。

「では、ご機嫌よう！」

シュタツと敬礼して劉勲たちは曹操の天幕を後にした。

「全く。君たちのせいで予定より早く追い出されちゃったじゃないですか」

「いや、何を言ってるんですか、隊長。自分たちはちゃんと隊長の作った台本通りにしましたよ」

実は先ほどの騒動は劉勲の計画だった。その点では曹操の『茶番』は的を得た言葉だった。

「いいや、君たちの演技がイマイチだったからです。どうせ、何人が荀イクちゃんとかに目を奪われていたのでしょうか？」

『ギクッ……………』

「全く。今回は日頃の慰安を込めて他国の少女を観察する企画を立ててあげたのに……………次は劉備さんの所ですからね。今度は頑張ってくださいね」

『はっ。我が命に代えてでも』

「あ、そう言えば隊長……………」

一人の黒子が手を上げる。

「あの時、本当に曹操ちゃんの下着を見たのですか？」

「……………え？あー、それは……………ミテマセンヨ」

明後日の方角を見る劉勲。

「隊長……………」

「何ですか、その目は！？見てないですよ！結構可愛い純白なんて見てないですよー！！」

「……………隊長、とりあえず簀巻きに重石で長江に流してから話を聞

きましようか」

「あれ？おかしいよ？その考えだと僕は先ず死ななくちゃいけない気がする」

「気のせいですよ」

「え？その縄は何？なんで縛るの？まさか今からなの！？ちよ、ちよつと待ってえええええ！！」

愚かな男たちの狂宴^{うたげ}はまだまだ続くのだった。

14話 その愚かな男たちは……（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5850w/>

その姫に従う者は.....

2011年11月27日23時39分発行